

木簡研閱

第七号

木簡研閑

第七号



木 簡 學 會

題字
藤枝
晃刻

卷頭言——刀筆の吏

一九八四年出土の木簡

概要

凡例

奈良・平城宮・京跡

奈良・平城京跡

奈良・奈良女子大学構内遺跡

奈良・法貴寺遺跡

奈良・藤原宮跡

京都・長岡京跡(1)

京都・長岡京跡(2)

京都・百々遺跡

京都・今里遺跡

山 口	林 村	木 村	山 口	清 水	加 藤	今 尾	文 昭	榮 原 永 道	男	1
29	28	26	25	23	22	20	19	15	9	5

大 阪	忍ヶ丘駅前遺跡	京 都	平安京左京八条三坊二町	京 都	平安京左京九条二坊十三町	京 都	平 安 京 左 京 九 条 二 坊 十 三 町	京 都	平 安 京 左 京 九 条 二 坊 十 三 町	京 都	平 安 京 左 京 九 条 二 坊 十 三 町
大阪	西ノ辻遺跡(1)	大阪	西ノ辻遺跡(2)	大阪	水走遺跡	大阪	西ノ辻遺跡(1)	大阪	西ノ辻遺跡(2)	大阪	水走遺跡
大阪	坪井遺跡	大阪	西ノ辻遺跡(2)	大阪	水走遺跡	大阪	西ノ辻遺跡(1)	大阪	西ノ辻遺跡(2)	大阪	水走遺跡
大阪	忍ヶ丘駅前遺跡	大阪	西ノ辻遺跡(2)	大阪	水走遺跡	大阪	西ノ辻遺跡(1)	大阪	西ノ辻遺跡(2)	大阪	水走遺跡
大阪	新里遺跡	大阪	大庭北遺跡	大阪	大庭北遺跡	大阪	西ノ辻遺跡(1)	大阪	西ノ辻遺跡(2)	大阪	水走遺跡
大阪	押環淀都市遺跡	大阪	大庭北遺跡	大阪	大庭北遺跡	大阪	西ノ辻遺跡(1)	大阪	西ノ辻遺跡(2)	大阪	水走遺跡
大阪	池田寺遺跡										

土 田 直 鎮

定 森 秀 夫

梅 川 光 隆

渡邊昌宏・福井田佳男

西 口 陽 一

西 口 陽 一

西 口 陽 一

西 口 陽 一

西 口 陽 一

西 口 陽 一

西 口 陽 一

西 口 陽 一

西 口 陽 一

西 口 陽 一

i

目

次

達	松	田	服	服	手	馬	栗	八	磯	吉	小	伊藤秋男・木村光一	梅	服	服	北	西	潮	加賀見	丹治
藤	浦	中	部	部	塙	潤	野	木	部	岡	烟	本	部	部	野	口	崎	見	康	黒田
俊	正	実	実	直	和	克	勝	武	伸	頼	也	博	志	也	和	也	也	省	恭	恭
武	和	夫	喜	喜	樹	雄	己	行	男	夫	孝	也	保	意	也	也	也	明	正	正
82	79	77	75	74	73	72	69	65	64	63	62	58	56	54	53	51	50	49	48	47

滋賀・野瀬跡	滋賀・野々宮遺跡
滋賀・小谷城下町遺跡	滋賀・尾上遺跡
長野・永田遺跡	滋賀・尾上遺跡
福島・膳所B遺跡	滋賀・尾上遺跡
福島・御前清水遺跡	滋賀・尾上遺跡
宮城・仙台城三ノ丸跡	滋賀・尾上遺跡
宮城・市川橋遺跡	滋賀・尾上遺跡
宮城・多賀城跡	滋賀・尾上遺跡
岩手・比爪館遺跡	滋賀・尾上遺跡
山形・大浦遺跡	滋賀・尾上遺跡
秋田・払田橋跡	滋賀・尾上遺跡
新潟・馬場屋敷遺跡	滋賀・尾上遺跡
岡山・百間川当麻道跡	滋賀・尾上遺跡
岡山・鹿田遺跡	滋賀・尾上遺跡
広島・草戸千軒町遺跡	滋賀・尾上遺跡
和歌山・西庄Ⅱ遺跡	滋賀・尾上遺跡
福岡・井上葉山堂遺跡	滋賀・尾上遺跡
佐賀・荒堅目遺跡	滋賀・尾上遺跡

八	倉	辻	近藤義郎・吉留秀敏	下津間	平	川	船	菊	地	政	信	高野芳宏・佐藤和彦	花菱博文・鍵田祐一	高倉敏明	結城慎一	芳賀英一	市沢英一	白井忠利	奈良俊哉	山崎清和	川瀬浩武	北川清和	遠藤義郎
116	114	113	110	109	108	103	101	100	99	95	94	92	91	90	89	88	87	85	84	83			

一九七七年以前出土の木簡（七）	118	
奈良・平城宮跡（第三十九次）	鬼頭清明	118
公式様文書と文書木簡	早川庄八	123
中国における最近の漢簡研究	大庭脩	121
英國出土のローマ木簡	田中琢	161
木簡史料紹介—牛札—	石上英一	187
		179

凡例

一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および訛文の記載形式等については編集担当の責任において調整した。

二、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

三、訛文の漢字はおむね現行常用字体に改めたが、「貢」「鹽」「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は「升」「井」「季」「牀」等についてのみ使用した。

四、訛文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す（単位はミリメートル）。欠損している場合の法量は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

五、訛文に加えた符号は次の通りである（七頁第一図参照）。

「」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていること

を示す。

木筒の上端・下端に切り込みのあることを示す。

抹消した文字であるが字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

抹消により判読困難なもの。

欠損文字のうち字数の確認できるもの。

欠損文字のうち字数が推定できるもの。

欠損文字のうち字数の数えられないもの。

前後に文字のつづることが推定されるが、折損等により文字が失われているもの。

異筆、追筆。

合点。

木筒の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

校訂に関する注で、原則として积分の右傍に付し、

本文に書き換えるべき文字を含む場合。

編者が加えた注で疑問の残るもの。

ママー文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

同一木筒と推定されるが折損等により直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかつた場合、行末・行初についたもの。

国版に写真的掲載されているもの。

一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し、国名を()内に示した。地図中の△は木筒の出土地点を示す。

二、积分の最下段に三桁で示した型式番号は、木筒の形態を示し、

つぎの一五型式からなる(八頁第二圖参照)。

011型式 短冊型。

013型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 小形矩形のもの。

022型式 小形矩形の材の一端を主頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいたもの。方

頭・主頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

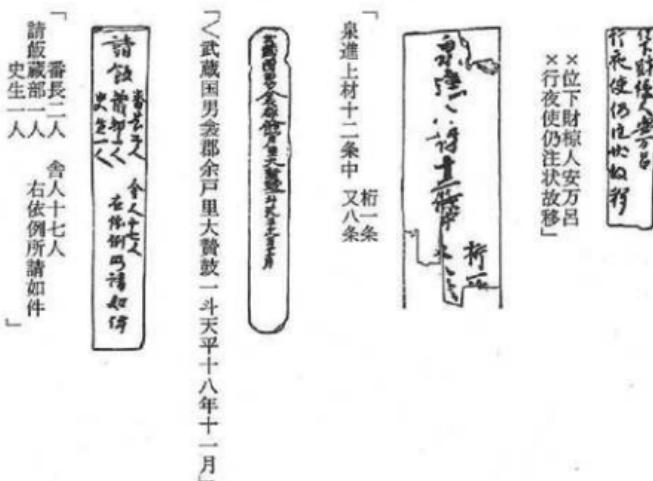
用途の明瞭な木製品に墨書きのあるもの。

(6)型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

(8)型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

(9)型式 削肩。

広島・草戸千軒町遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒町遺跡調査研究会『草戸千軒—木簡一一』を参照されたい。なおその他の中世木簡については以上の型式番号に適合しないものが多いため、注記を省略したものもある。



第1図 木簡訣文の表記法

府台 本儀猪養 左可間給儀事在右宜加

休不遇日時參向府庭若望凌歛之罪
五天大吉大利 諸吉門好運

故中國羽林將軍男作物籍壹伯隻

奉十八年大直

國慶國之舊物表於佛凡海阿耶男御御僧二片

廣德廿九年正月廿四日 墓地三寸

三方形
林文昇中村里
三片

051型式

032型式

033型式

037型式

011型式



0 5 10 15cm

第2図 木筒の形態分類

				木簡学会役員
幹事会		委員会	副会長	会長
橋本義則	館野和己	原秀三郎	佐藤清足	岸大庭
可田章	寺崎保広	坪井清足	門脇宗諱	青木和夫
和田莘	東野治之	直木孝次郎	植二郎	岩本平野
			田中直木	狩野邦雄
			田中琢	次郎久
			早川庄八	鬼頭清明
				岡崎敬
				柴頭稔

奈良・平城京跡

1984年出土の木簡

- 1 所在地 奈良市法華寺町・芝辻町・四条大路
- 2 調査期間 平城京左京二条二坊十二坪・二条大路 一九八四年(昭59)七月~一二月、左京一条三坊十二坪 一九八四年一月、左京四条二坊七坪 一九八四年一〇月~一一月、左京三条三坊九坪 一九八四年九月
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 西崎卓哉・篠原豊一・立石堅志・奈良美穂
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
一 平城京左京二条二坊十二坪・二条大路
本遺跡では、さきに十二条西半部から二条大路にわたる地域の調査を行っており、その成果はすでに報告した(『木簡研究』第五・六号)。今回の調査は十二条東半部からわずかに二条大路にかかる地域を対象として行った。両調査区をあわせて四五二〇坪、十二坪の三分の一ほどを発掘したことになる。

今回検出した主な遺構は二条大路の一部とその北側溝・築地堀・



礎石建物二棟・回廊・掘立柱建物二〇棟・井戸一基・土壌である。さきの調査成績とあわせて、一二坪が一町を分割することなく利用されており、中央の正殿を回廊で取り囲むというわれめて整然とした建物配置をもつことが知られた。

三 平城京左京四条二坊七坪

木筒は二条大路の北側溝から二二点が出土した。同溝は幅三・五

~四・五m、深さ〇・七mほどの素掘りの東西溝。今回は四〇m分を検出している。

堆積層からみて、溝には新・旧の一時期があり、それぞれの時期の堆積層はさらに細区分できる。木筒は、このうち新期の溝の最下層、黒色粘土層から出土した。他に瓦・土器・木製品が出土しているが、この中には「店契」の墨書き土器が含まれる。

また、十二坪内では「相模」「□撫所」「左士」「喜万呂」などと墨書きされた土器が出土している。

二 平城京左京一条三坊十二坪

本調査地は十二坪の東辺龍、十二・十三坪坪境小路にほど近い地点にある。発掘面積は六〇坪と小範囲であったが、井戸一基・柱穴・自然流路を検出した。柱穴は発掘範囲が狭いこともあり建物と

してはまともならない。このうち井戸から四点の木筒が出土した。

井戸掘形は、検出面では様一・五mの平面円形を呈し、深さは二・五mある。井戸枠は存在しておらず、おそらくは素掘りのまま使用されたものであろう。井戸内の堆積土は、井戸底近くの自然堆積とその後の埋め立てによるものと大きく二分できる。木筒は自然堆積土の最上層、被物遺体層から出土した。この井戸からは他に奈良時代前半期の土器と数点の木製品が出土しており、木筒もこの時期に投棄されたと考えられる。

四 平城京左京三条三坊九坪

本調査地は七坪の東辺部から東二坊坊間大路の一部に相当する。周辺は平城京跡内でも比較的調査例の多い地域であり、調査地の東、東二坊坊間大路を隔てた左京四条二坊の東半は「田村第」に比定されている。今回検出した主な遺構は東二坊坊間大路の一部とその西側溝、掘立柱建物四棟、堀一條、井戸一基、土壌である。

木筒は東二坊坊間大路西側溝から二点が出土した。同溝は幅一・九m~三・一m、深さは発掘区北端で〇・三m、南端で〇・八mの素掘りの南北溝。今回は一三・五m分を検出した。溝内の堆積土は大きく上・下二層に分けることができる。上層は流れのためか二~五

本調査地は平城京の条坊区画では左京三条三坊九坪の西北隅に相当するが、周辺の遺存地層の検討から、調査地のすぐ北を西流する佐保川の旧河道が想定される地点もある。

調査の結果、現地表面下約1・3mで発掘区全域に広がる自然流路を検出した。発掘面積が四〇・五畝と小範囲であったためその規模は不明であるが、堆積層からみて流路には新・旧二時期があることがわかる。木筒は旧流路内の堆積土から一点が出土した。旧流路からは他に古墳時代の埴輪片、近世の土器など各時代の遺物が混乱して出土しており、木筒の年代を決めることはできない。

8 木筒の积文・内容

一 左京二条二坊十一坪・二条大路

- (1) 「封」 (156) × 30 × 4 039 *
- (2) 「猿島大^田_口」 (156) × 30 × 8 031
- (3) 「水精玉所食^人……^人」 (156) × 30 × 8 032
- * 「檢」 □……十^集_底 (125+75) × 30 × 3 011 *
- (4) 「江下鶴秦×」 (74) × 22 × 2 039 *
- (5) 「造廣□五斗□」 (74) × 22 × 2 039 *
- * 「」 [部^ノ] (203) × 31 × 7 031
- (6) 「毛□」 (70) × 65 × 4 051
- (7) 「少^少□」 (85) × 14 × 3 059
- (8) 「」 [部^ノ] (204) × (11) × 3 061
- (9) 「一月」 (209) × (10) × 3 061
- (10) 「物^ア霜秦」 (138) × (17) × (1) 061
- * 「」 (107) × 20 × 2 019

14. 「播磨国篠」
〔播磨〕
・「史戸大田」
×

・「史戸大田」
×

(77) × 17 × 3 039 *

他に折損により原形が明らかでなく、墨痕はあるが判読不可能なもの三点がある。

三 平城京左京四条二坊七坪

13. 「道秦尼寸」
〔公文〕
・「右口上五人」
□

〔右口上五人〕
□

(156) × 19 × 5 019

・「右口上五人」
□

(156) × 19 × 5 019

14. 「道秦尼寸」
〔公文〕
・「右口上五人」
□

四 平城京左京三条三坊九坪

15. 「封」
〔人形〕
・「右口上五人」
□

(91) × (17) × 2 081

・「右口上五人」
□

(1) •「封」
•「封」

(1) は材の上端近く、左右の切り込みがある部分に「封」字のみを墨書きする。下端を欠損しており全体の形状は明らかではない。「封」字はその中央で、横向方向に幅六寸ほどとぎれてしまい、これは長方形の材を紐で物品（あるいはその容器）に固定したのち、紐の上から

「封」字を記したからだと考えられる。（つまり、この木筒をもつて封をしたのである。）（2）は二片に分離しており、直接には接合しないが、材質・形状からみて同一箇かと思われる。他に墨痕はあるが判読不可能なもの七点がある。

二 平城京左京一条三坊十一坪

(1) 「右口上五人」

98 × 15 × 3 033

材の一側面にも墨痕がある。○一一型式としたが、中世木筒の範畴でとらえるべきものかもしれない。

9 関係文献

平城京左京一条二坊十二坪水道局庁舎建設予定地発掘調査会「平城京左京一条二坊十二坪水道局庁舎建設地発掘調査概要報告」（奈良市教育委員会 一九八四年）

奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和五九年度」（一九八五年）

大宰府出土木簡概報（第二集）の刊行

昭和五一年に第一集が刊行されて以来、十年ぶりに第二集がまとめて刊行された。第二集は、昭和四九年度以降に出土した二六八点の木簡のうち、主要な一四一点についてその概要を報告したものである。各年度の発掘調査概報『大宰府史跡』で既に報告済みの木簡であるが、訛文が訂正されたものが一部あるので注意を要する。収録された木簡は、大別して六地区から出土しているが、その半数以上は大宰府政庁地区の西南隅に接する不丁地区からのものである。不丁地区出土の木簡については木簡学会第六回研究集会で報告され、また本誌第六号でも概要が紹介されている。木簡には紫草関係の木簡一五点、付札五八点等内容的にまとまるものがあり、古代の大宰府を考える上で注目されるものが多い。

なお、本書には古代の大宰府とは直接の関係をもたない中世木簡や板卒塔婆、呪符等も取められている。

九州歴史資料館発行

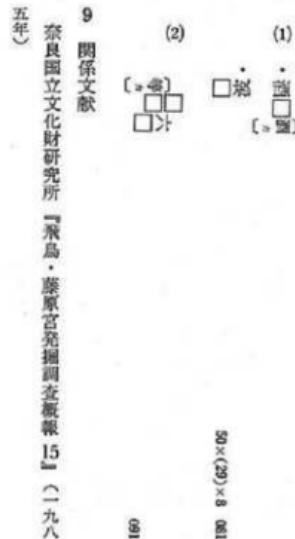
『大宰府史跡出土木簡概報(二)』

(A4版 八三頁 一九八五年三月刊)

〈申込先〉 福岡県太宰府市太郎左近 九州歴史資料館
料費及会員
額 1000円 ￥250円

奈良・藤原宮跡

- 1 所在地 奈良県橿原市高殿町
 - 2 調査期間 一九八四年(昭59)四月~一〇月
 - 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
 - 4 調査担当者 犬野 久
 - 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
 - 6 遺跡の年代 七世紀末~八世紀初頭
 - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
 - 8 木簡の収文・内容
- 本調査は数年来計画的に行ってある東方官衙地域調査の一環である。場所は大極殿の東北で、内裏外郭界の東約四〇m、宮東西大垣の西方二二〇mに当り、面積は一二六〇m²である。
- 検出した主な遺構は、約一二・七m離れて平行する二条の据立柱東西軸で、長さ五〇m以上あり、それぞれ東端で南北にL字状に曲がり発掘区外に延びる。この堀は南北二つの官衙ブロックを区画する堀とみられ、北側の北と南側の南が官衙内であり、両堀の間は通路であろう。この種の堀としては宮内で初めて検出したものである。両堀の西端は内裏外郭付近の南北溝まで達するとみられ、東面北門を通る宮内東西道路との関係からみて、北官衙ブロックは一边約八〇mの正方形に近い区画が想定できる。



(加藤 優)
奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告』15 (一九八五年)

この他の遺構としては、平安時代の小規模建物や堀・井戸・古墳時代の、角柱を用い、棟持柱を持つ総柱建物や溝等がある。

遺物は、瓦・須恵器ミニチュア杯・綠釉陶器・新羅土器・墨書き器・滑石盤石鍋・錢貨(伴功開室)等がある。墨書き土器は平安時代初期の井戸からの出土で、「開口」「閉口」「家」等の文字がある。木簡は北官衙ブロックの東西軸の三個の柱掘形中から三点、東西屏より古い七世紀後半の土壤中から一点出土した。掘形中のものは断片や削屑で、うち一点は全く判読できない。土壤出土のものは長さ四五・五四、幅四・二mあり、表裏に墨痕があるが、腐蝕が甚しく、判読不能である。収文は判読可能の二点のみを掲げた。

京都・長岡京跡(3)



- 1 所在地 京都府長岡京市野添二丁目一一五一他
 2 調査期間 一九八四年(昭59)七月~八月
 3 発掘機関 朝長岡京市埋蔵文化財センター
 4 調査担当者 木村泰彦
 5 遺跡の種類 都城跡
 6 遺跡の年代 長岡京期(八世紀末)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

当調査地は、長岡京三条坊復原による右京三条二坊十二町にあたり、小畠川によって形成された氾濫平野上に位置している。すぐ南には比高差約一mの洪積段丘下位崖面とそれに沿って流れれる風呂川が、北西と南東方向に伸びている。

今回の調査は、長岡京市営住宅建設工事に伴う第一次のもので、長岡京跡右京(京第一六八次調査として実施したものである。

調査の結果、遺構は検出されなかつたが、風呂川によって西方から運ばれた砂礫および粘土の堆積層が確認され、そのうちの灰色粘土層と暗灰色粘土層から多量の長岡京期の遺物が出土した。木簡は削屑を含めて三点あり、いずれも灰色粘土層からの出土である。

他の遺物には、土簡器、須恵器の供膳・貯藏・煮沸形態を始め、転用硯、墨書き器、製塙土器、土馬、軒丸瓦(平城宮六一三三)、神功開室、鉄釘、砥石、箸、櫛、曲物、草鞋、不明木製品、加工木片、自然木、種子、昆虫遺体などがあり、ほとんどが段丘で占められる右京城内では珍しく有機物の保存状態が良好であった。

墨書き土器は、判読し得るものとして「衛門」・「辯」・「右」・「大」・「移」がある。このうち「衛門」は破片を含めて三点あり、当地周辺に存在した施設の性格を推定する手掛りとなるものであろう。長岡京において諸司厨町が形成されていたという指摘はすでになされているが、「拾芥抄」によれば、平安京内の左右衛門町は右京三条四坊にある事が見えており、あるいは長岡京においても右京三条周辺に「衛門町」が存在した可能性があるかも知れない。

「弁」は獸を捕えるためのおとし穴のことと、「日本書紀」天武四年四月十七日条に「櫛辨」を作成する事の禁止がみえ、「令義解」雜令に「櫛辨」を施す時、人に害を与ぬよう注意すべき規定が見られる。何れも土器にこの様な文字を書いたのか、他の意味があるのかは不明であるが、他の墨書き器、木簡と合わせ興味深い遺物である。

(1)

「上野國□□□□□□□□□□
 「日奉□□□□□□□□□□」
 (部+) (因+)

(151)×(6)×12 081

「日奉□□□□□□□□□□」
 (部+) (因+)

(177)×44×4 081

(2)

□□□□□□□□□□

(151)×(6)×12 081

(3)

□□□□□□□□□□

(177)×44×4 081

(1)は比較的厚い板材の表裏に墨書きしたもので、両刃と下端が欠失し、かろうじて文字の中央が遺存している。表に国名が、裏に人名らしきものが書かれており、文書木簡と推定される。

(2)は一行の墨書きがあるが全体に薄く、「鳴」の一字のみが読みとれる。他の文字も同じ字の可能性が高く、習書木簡と思われる。

(3)は墨書きは鮮明であるが破片が小さく判読不能である。

なお本木簡の积文については、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室のご協力と鬼頭清明氏、綾村宏氏の御教示を得た。記して謝意を表します。

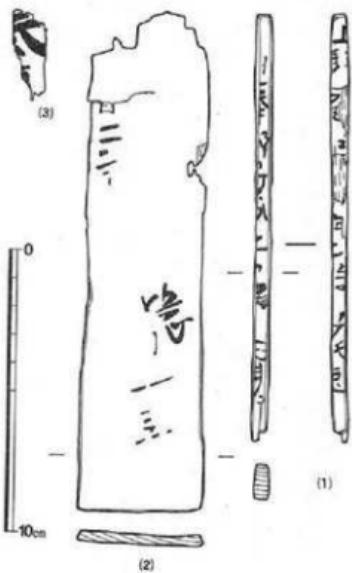
(木村泰彦)



墨書き土器「衛門」



不明木製品



京都・百々遺跡（推定第三次山城国府跡）

・万年通宝・神功開宝・富壽神室)・鎌形鉢尾・木筒などの遺物が出土した。

- 1 所在地 京都府乙訓郡大山崎町字円明寺小字百々
2 調査期間 一九八四年(昭59)六月
3 発掘機関 大山崎町教育委員会

- 4 調査担当者 林亨

- 5 遺跡の種類 国府跡・古道跡

- 6 遺跡の年代 八世紀末～一〇世紀

- 7 遺跡及び木筒出土遺構の概要

本遺跡はこれまで三次(一九八一)の調査を実施し、長岡京時代(八世紀末)から平安時代(一〇世紀)にかけての遺構を検出した。そ

の主なものは、掘立柱建物

四棟以上、井戸跡、山陽道

跡及びその側溝等である。

また、中国磁器・二彩陶器

・緑釉陶器・黒色土器・須恵器・土頭器・錢(和同開珎)



(京都西南部)

奥胡万七斗外一升

(1) 「奥胡万七斗外一升」

198×12.5×2.5 633

一九八一年以来行つてきた発掘調査によつて、九世紀代を中心とする数多くの遺構、遺物が出土したが、これらがどのような性格をもつてゐるかについては、現在、文献とも照らし合わせて検討中である。いま最も考えられることは、延暦十六年(七九七)、長岡京の南に移されたといふ山城国府の施設の一端ではないかということである。

8 木筒の积文・内容

9 関係文献

大山崎町教育委員会「大山崎町の歴史と文化」(一九八四年)

(林亨)

京都・平安京左京八条三坊二町

1 所在地 京都市下京区西洞院通塩小路上ル東塩小路町六〇

2 調査期間 一九八四年(昭59)七月~一月

3 発掘機関 平安博物館

4 調査担当者 定森秀夫・片岡 雄・藤谷 寿

5 遺跡の種類 部城跡

6 遺跡の年代 平安時代~江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本遺跡は、当盤が昭和五四~五五年に調査した新京都センタービ

ル敷地の西隣りにあたる。

今回の調査では、主な遺構として、平安時代前期~

中期の溝、鎌倉時代の常滑

・東播系須恵器大甕を使用

した甕棺墓や木棺・土墳墓等を検出した。また、江戸

時代では用水路によって区

画された畠を確認した。



(京都東南部)

木簡が出土したのは、平安時代の溝で、これは当盤が前回調査した大溝の西への続ぎとなる。溝内にはほぼ三層に分けることができたが、木簡は中層の暗灰色粘質土層から出土した。共伴遺物には、多量の土器の他、人形・桶・下駄・舟等の木製品や木材片・木片、動物骨・植物遺体があり、少量ではあるが石帶・土麿・土馬等も出土している。墨書き器では、土師器・須恵器とも「大」とかかれたものが多く、他に「人給酒」ととかかれていた土器皿等もあった。共伴遺物よりみて、ほぼ九世紀代のものと思われる。

8 木簡の記文・内容

(1) 「三月十九日 (14)×19×4 651

(2) 「山代□

・六年□月□

・六年□月□

(3) 在京□

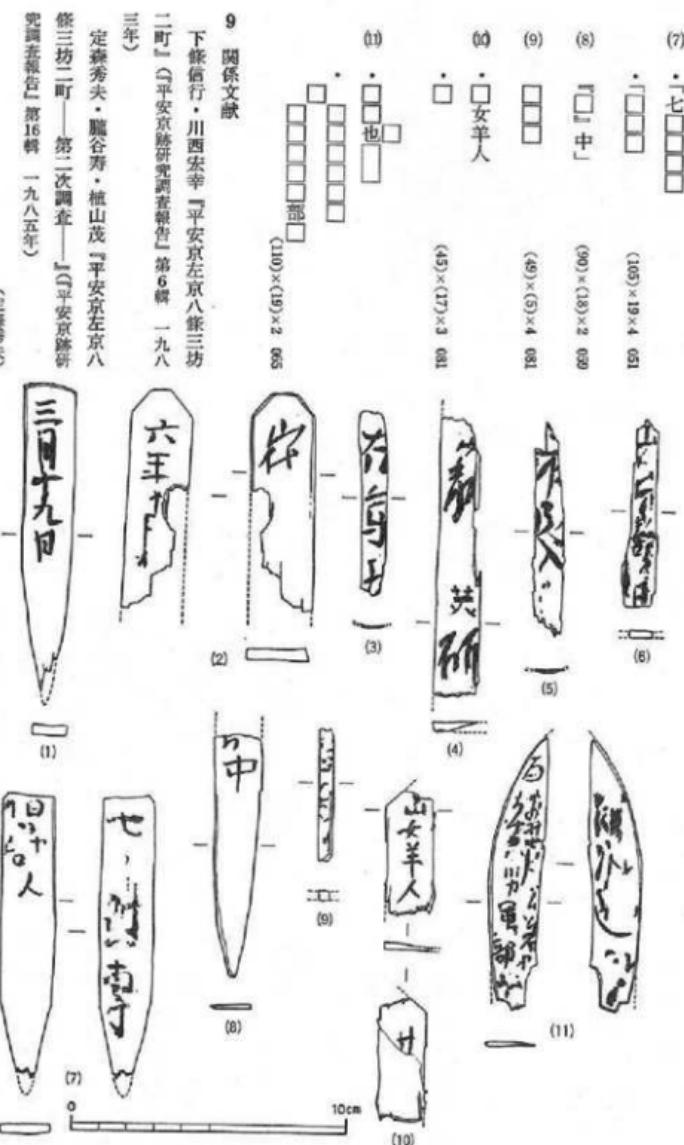
[節△] [表] [研△]

(69)×(10)×(1) 651

(69)×(17)×4 661

(69)×(11)×(1) 661

□□□□□



木簡研究第三号

卷頭言——中國簡稱呼称についての提言——

大庭 錠

一九八〇年出土の木簡

概要

平城宮・京跡 平城宮左京(外京)五条五坊七坪 藤原宮

跡 種田遺跡 下ノ道 長岡京跡 大藏司遺跡 西沖遺跡

御殿・二之宮遺跡 野路岡田遺跡 多賀城跡 漆町西遺跡 桜

町遺跡 白山橋遺跡 御館遺跡 御城跡 鴨・城山遺跡 草戸

千軒町遺跡 菖田地区遺跡 観世音寺僧房跡 大宰府學校院跡 東

辺部

一九七七年以前出土の木簡 (二)

平城宮跡 (第二二次・第三三次北) 菘跡寺 下岡田遺跡

中國における簡牍研究の位相

唐米付札について

静岡県城山遺跡出土の具注墨木簡について

草戸千軒町遺跡出土の木簡——形態を中心にして——

原秀三郎 志田原重人

叢報

価値 三五〇〇円
■四〇〇円



(大阪東北部)



大阪・坪井遺跡

- 1 所在地 大阪府四條畷市岡山
- 2 調査期間 一九七五年(昭50)一月～一九七六年三月
- 3 発掘機関 四條畷市教育委員会
- 4 発掘担当者 野島 稔
- 5 遺跡の種類 禁落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代後期、平安時代後期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺物の概要 坪井遺跡は、生駒山系から派生する洪積台地上の標高約二六mに立地している。忍ヶ丘駅前遺跡の北側、四條畷市と寝屋川市境の讚良川までの範囲が周知の遺跡として知られている。京都の東寺から高野山に至る東高野街道沿いに広がる集落跡であった。一九七五年

に、国鉄片町線複線化に伴う事前発掘調査を四條畷市教育委員会が実施した。その結果、柱穴・石組井戸・曲物井戸・素掘り井戸・溝等多数が検出された。木簡は、径三・五m、深さ一・五mの素掘り井戸から瓦器碗・土器皿・羽釜・下駄・木槌・槌ノ子・漆器椀とともに出土したもので、土器型式からみて一二世紀末に比定されるものである。

8 木簡の収文・内容

- (1) 「こむき三斗六升
- 「こむき三斗六升

(197) × 21 × 4 019

(野島 稔)

大阪・忍ヶ丘駅前遺跡

しのぶがおか

- 所在地 大阪府四條畷市岡山
- 調査期間 一九七六年(昭51)二月~四月
- 発掘機関 四條畷市教育委員会・四條畷市文化財研究調査会
- 調査担当者 野島 稔
- 遺跡の種類 集落跡
- 遺跡の年代 古墳時代中期、鎌倉時代と室町時代
- 遺跡及び木簡出土遺構の概要 忍ヶ丘駅前遺跡は、生駒山系の西側斜面から派生する洪積層の標高約二十五mの丘陵地形を利用して立地している。国鉄片町線忍ヶ丘駅を中心とする約四五〇〇m²の範囲が周知の遺跡として知られている。
- 駅を中心とする約四五〇〇m²の範囲が周知の遺跡として知られている。
- 一九七六年に枚方信用金庫忍ヶ丘支店建設が計画され

れたため、四條畷市教育委員会・四條畷市文化財研究調査会が事前発掘調査を実施した。この付近は、古墳時代を中心とする遺物の散布が認められていたが、調査の結果、古墳時代の遺構面は削平され、柱穴、井戸跡および溝等があり、木簡は幅約五m、深さ一mの南北方向に流れる溝の最下層から出土した。

8 木簡の积文・内容



○・三四の穿孔が表からなされており、釘で打たれた可能性が強い。

9 関係文献

四條畷市教育委員会『忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要・I』(一九八三年)

大阪府立泉州考古資料館『記された世界』(一九八三年)

(野島 稔)



《大阪東北部》



大阪・堺環濠都市遺跡



(大阪西南部)

遺跡及び木簡出土遺構の概要
遺跡の種類
遺跡の年代
遺跡の構成
調査担当者
発掘機関
調査期間
所在地

堺環濠都市遺跡は、南北三km、東西一km、標高一・〇mと五・〇mの砂礫堆上に立地する。一九八二年に鶴大阪冠堺葬祭互助会ビル新築工事とともに、堺市教育委員会が事前発掘調査を実施した。応永の乱勃發(一三九九年)以降、豊臣氏

滅亡(一六一五年)までの約二〇〇年間を中心とする遺跡であるが、砂礫堆面に形成された後背湿地からは弥生時代から鎌倉時代までの

- 1 所在地 大阪府堺市市之町東四丁一六・一〇・一一
- 2 調査期間 一九八二年(昭57)七月一月
- 3 発掘機関 堀市教育委員会
- 4 調査担当者 北野俊明・野田芳正
- 5 遺跡の種類 環濠都市遺跡
- 6 遺跡の年代 一四世紀と一八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 8 木簡の积文・内容

(1) 「天正十三 □□」

・「天正十三 [十] 月吉□」

(2) •△八郎 [所門附]

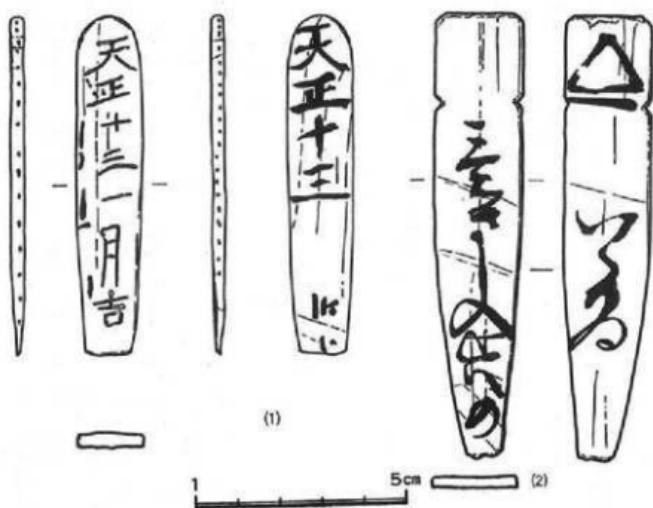
・△□□□入□□

81×16×3
(70)×33×4

堺市教育委員会『堺市文化財調査報告 第二十集』(一九八三年)
(野田芳正)

遺物も出土しており、遺跡周辺における歴史の古さをうかがわせる。調査の結果、当地点では現況G-L下約一・〇mで段丘層が検出され、遺構は、これをベースに形成されている。遺構面は、大きく上・下に三分され、その年代觀は、上層遺構が一八世紀代に、下層遺構が一六世紀後半と一七世紀初頭に比定される。当該遺物は、調査区南西隅より検出された堀(下層遺構)から三〇〇〇点の木製品とともに出土した。

1984年出土の木筒



『下野国府跡 資料集I』の刊行

下野国府跡から出土した木簡については、本誌でもしばしば紹介されていたが、このたび『下野国府跡 資料集I』としてまとめられた。下野国府跡の発掘調査と木簡出土遺構の概要、出土木簡の釋文と一部の写真図版等が収載されている。例言によれば下野国府跡出土遺物（木簡・漆紙文書）の整理用資料であるとのことである。写真図版の完備した正式報告書の刊行が待たれる。

栃木県教育委員会・財團文化振興事業団発行
『下野国府跡 資料集I（木簡・漆紙文書）』
(B五版 三八頁 一九八五年三月刊 非売品)

兵庫・川岸遺跡

かわぎ



(出)

一九八四年、町道の新設工事に伴い発掘調査を行ったところ、八世紀前半～九世紀前半にかけての溝を二条検出した。

- 1 所在地 兵庫県城崎郡日高町松岡字川岸
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)一二月～一九八五年三月
- 3 発掘機関 日高町教育委員会
- 4 調査担当者 加賀見省一
- 5 遺跡の種類 官衙関連遺跡
- 6 遺跡の年代 ハノ九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
川岸遺跡は、円山川の左岸、標高約一六mの冲積平野に形成された遺跡である。遺跡は、旧但馬國氣多郡の東部に位置し、西南約一kmには但馬國分寺、西方約七〇〇mには但馬國分尼寺が置かれた律令時代における但馬國の中心地である。また、遺跡の周辺には但馬國府の所在地が数箇所推定されている。

ころ、八世紀前半～九世紀前半にかけての溝を二条検出した。このうちのしがらみで肩部を補強した幅約一・五mの溝から木簡が出土した。木簡は、文字の判読できるものは一点のみで、他に墨痕は認められないが付札が一点出土している。他に、この溝の埋土には墨書土器や、人形・馬形・畜牛などの木製品も多く出土しており、官衙施設に付随する遺跡ではないかと思われる。

8 木簡の积文・内容

(1) 労万呂

・ 十四日

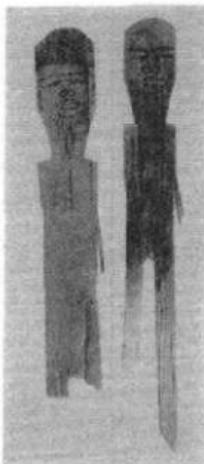
一

(95)×(24)×2 0.81

(加賀見省一)



人形



兵庫・倉見遺跡



(出石・城崎)

- 1 所在地 兵庫県豊岡市倉見
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)八月
- 3 発掘機関 豊岡市教育委員会
- 4 調査担当者 潮崎誠
- 5 遺跡の年代 平安時代～江戸時代
- 6 遺跡及び木筒出土遺構の概要
- 7 遺跡の種類 集落跡
- 8 木簡の積文・内容

倉見遺跡は、豊岡市の東南部に位置しており、円山川の支流である小野川をのぞむ北西向山裾に立地している。今回の調査は、県道

香住・大谷線の拡幅に伴う工事中の立会調査で、県教育委員会と市教育委員会の両者があたつたものである。

木筒は、工事用排水のため水田に設けられた集水坑の上げ土から単独で発見されたもので、これに伴うような他の遺物は皆無である。

本遺跡周辺の歴史時代の遺跡としては、北方約1kmの香住字荒原で、は場整備中に人形・亥串などの木製品が出土している。また、さらに北側の三宅地区には、白鳳時代の瓦・鶴尾片を出土する豪華寺跡が知られている。

(1)

「御はこ□奄古」

165×18×2 651
(潮崎誠)

兵庫・前東代遺跡



(尼崎)

6 前東代遺跡
7 挿磨國分寺
8 遺跡及び木簡出土遺構の概要
9 挿磨國分寺が所在している。また、南に御着城があり、発掘調査の
10 所に予定されたので、
11 兵庫県教育委員会は遺
12 跡の事前発掘調査を実
13 施した。

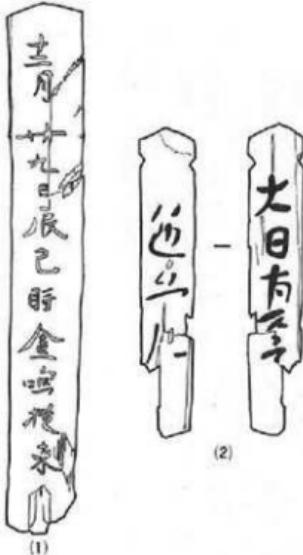
- 1 所在地 兵庫県尼崎市御野町深志野
- 2 調査期間 一九八三年(昭58)六月~九月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 西口和彦・水口富夫
- 5 遺跡の種類 旧河川跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代・奈良時代・平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

前東代遺跡は、尼崎市東部に位置し、西方約1kmに瓊島山古墳や

御着城が所在している。また、南に御着城があり、発掘調査の
所に予定されたので、
兵庫県教育委員会は遺
跡の事前発掘調査を実
施した。

当初は、御着城の外濠検出
を目指して開始した。兵庫
県道路公社による播但連絡
有料自動車道の建設が、御
着城の外濠跡と想定される
ところである。

現地は、北西から南東にかけ約200m間に、幅約10~15m
の凹地が続いていた。調査によって、この凹地は平安時代後期には
埋没した旧河道と判明し、またこの河に合流する大溝も検出した。
以下に報告する木簡は、この大溝が旧河道に流入する付近で出土し
たものである。木簡以外に、大溝や旧河道から出土した遺物には、
弥生式土器・土師器・須恵器の土器類、大形蛤貝石斧、二叉鋤や曲
物容器・下駄等の木製品がある。さらに、底部外面に「十」の墨書
のある須恵器が出土している。木簡以外では、頭部や両側部を削
った人形が二点、用途不明木製品(扇扇)一点、(2)と同じ形態の木
札が一点出土している。内容や形態からこれら木札は板塔婆および
呪符の類と考える。



調査の結果、御着城の外濠は認められず、旧河道の検出のみに終った。また、住居跡等の生活跡も調査範囲内では検出されなかつた。

8 木簡の収文・内容

(1) 「十二月廿九日辰巳時金^{〔鷹〕}從東

(416)×37×11 019

(2) 「大日真^{〔音〕}」

・「尺迦^{〔半尼〕}」

(116)×20×5 059

(1) は、墨が流出し、文字が木面より浮きあがっている。裏面には墨書は認められない。

(2) は、赤外線テレビにより判明したものである。

(1)・(2)とも訛説にあたつては、奈良国立文化財研究所の鬼頭清明氏の御教示をいただきたい。

9 関係文献

兵庫県教育委員会『前東代遺跡』(一九八五年)

(西口和彦)

木簡研究 第四号

卷頭言——木簡保存法の思い出——

坪井清足

一九八一年出土の木簡

坪井清足

概要 平城宮跡 奈良女子大学構内遺跡 法隆寺 藤原宮跡 長岡京跡 三条西殿跡 烏羽難宮跡 若江遺跡 佐堂遺跡 大坂城
三の丸（大手口）遺跡 小曾根遺跡 尾張國府跡 下津城跡 坂尻遺跡 小川城跡 桓川遺跡 三ツ寺Ⅲ遺跡 下野國府跡 多賀城跡 郡山遺跡 胆沢城跡 道伝遺跡 笹原遺跡 明成寺遺跡 安田遺跡 大森鐘島遺跡 高堂遺跡 漆町遺跡（C地区） 南吉田葛山遺跡 百間川遺跡群（原尾島遺跡） 草戸千軒町遺跡 道照遺跡 長門国分寺跡 野田地区遺跡 湯川神社境内遺跡 大宰府跡（大輔地区） 九州大学（筑紫地区）構内遺跡 長野遺跡
辻田西遺跡

一九七七年以前出土の木簡（四）

平城宮跡（第二二次南・第二七次・第二八次・第二九次）

祝符木簡の系譜

和田 草谷博泰

木簡と上代文学

水産物付札をめぐって

佐藤宗諱

「漆紙文書」出土概要

業報

価額 三五〇〇円 ￥四〇〇円

愛知・朝日西遺跡



- | | |
|-----------------|--|
| 所在地 | 愛知県西春日井郡清洲町 |
| 調査期間 | 一九八四年(昭59)七月～一九八五年三月 |
| 発掘機関 | 財愛知県教育サービスセンター |
| 調査担当者 | 追藤才文・金原 宏・佐藤公保・小沢一弘・丹羽 博・服部哲也 |
| 遺跡の種類 | 城郭・都市跡 |
| 遺跡の年代 | 鎌倉と江戸時代 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 朝日西遺跡は、五条川東岸の自然堤防上に展開する中世と近世の複合遺跡であり、中世末の清洲城下町のなかでは、内堀と外堀の間に位置する。発掘調査は、名古屋環状二号線建設に伴い、昭和五六年以降進められ今年度で終了する予定である。 |
| 8 木簡の积文・内容 | 五九年度調査区は、清洲城下町のうち町人地区に比 |

SD一三は、南北方向からほぼ直角に東へ折れ曲がる溝であり、幅五mと六m、深さ三〇cmと一二〇cmを測る。溝中からは、多数の土器類の他、漆塗り椀、下駄、石製五輪塔・宝鏡印塔の各部分などを発見した。五輪卒塔婆(1)～(5)は、溝が方向を変える地点の下層粘土中から、一九本が重なり合う状態で出土した。また、卒塔婆以外の文字資料として、「南無阿弥陀仏」と墨書きされた木簡、「文様二年」(一五九三年)の年号が記された施釉陶器(質御口)椀がある。

SD一一は、南北方向に走る溝であり、幅約七m、深さ約九〇cmを測る。下層粘土中からは土器を中心とした土器類の他、多種多様の木製品(箱・折枝・杓子・曲物類・漆塗り椀等々)、さらには人骨(頭骨で四体分)、多量の椎骨類が出土した。木簡類はこれら遺物群に混在する状況で発見され、位牌と考えられるもの(6)～(9)の他、柿種の断簡、文書木簡らしいものがある。

これら木簡類の出土した二つの溝の年代は、卒塔婆(慶長三・四年、一五九八・九年)墨書き土器(文禄二年、一五九三年)の紀年銘資料から、或いは共伴遺物の年代観によって、清洲城下町が最も繁栄した一六世紀末と一七世紀初頭に考えられる。

SD-1

- (1) 「**帰依仏法僧** 南無六道 右志者為淨門 薩長四年 六月初七日白」
678×85×1.6 (61)
- (2) 「**復々々々々** 若人欲了知三世一切仏
三界唯心造應觀法界性 矢為道西」
678×85×1.6 (61)
- (3) 「**地水火風空** 其後當作仏
号名曰弥勒 右志者 淨門 6月十四日白」
678×85×1.8 (61)
- (4) 「**水菊在月手** [美花香] 衣 七
(梵字)」
678×85×1.8 (61)
- (5) 「**五蘊本來空** 文殊大
右志者為淨門 五月四日白」
(665+74)×85×1.9 (61)
- (6) 「**飯寂** 斜公久々瓦位」
191×27×2 (61)
- (7) 「**物故宗見禪定門**」
187×27×2 (61)
- (8) 「**梅月淨白**」
195×29×2 (61)
- (9) 「**物故者八郎殿十月十五日**」
210×30×1.5 (61)
- (10) 「**源八殿へ久々八月念三日**」
240×30×1 (61)
- (1) ~ (5)は一九点出土した五輪卒塔婆(墨書きが確認できたものは一四点)のうちの五点であり、追善供養の為の七本塔婆と考えられる。
(4)は揮書に引用される漢詩で、宗派が禪宗であることを示唆する。
(6)~(10)は位牌であろうが、同様な例として他に六点出土している。これらは卒塔婆、位牌を他例と、或は近世以降の確立された書式と比較すれば、その形式、書式にそぐわない点が多々見受けられ、当地における近世以前の仏教文化を窺う上で貴重な資料と考える。
なお、木簡の収蔵は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の全面的な御指導を得た。記して謝意を表します。

(無能者也)

愛知・清洲城下町遺跡



- | | |
|-----------------|--|
| 1 所在地 | 愛知県西春日井郡清洲町 |
| 2 調査期間 | 一九八四年(昭59)六月~一〇月 |
| 3 発掘機関 | 愛知県教育サービスセンター |
| 4 調査担当者 | 福岡晃彦・梅本博志・長島 広・清水雷太郎・梅村清春・宮原健司 |
| 5 遺跡の種類 | 城郭・都市跡 |
| 6 遺跡の年代 | 鎌倉と江戸時代 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | <p>清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南流する木曽川水系五条川の西岸に発達した自然堤防と、その背後地上に位置する。</p> <p>調査地点の近くには、南北三〇〇m程の所に、遺跡名の由来となった清洲城本丸推定地があり、また五条川を挟んだ東岸では、ほぼ同時期を同じくする朝日西遺跡の調査が進められている。</p> |

木簡類の出土した五九年度調査地点は、「清洲町史」等によれば清洲城を巡る三重の「堀」のうち、内堀と中堀の間に比定され、武家屋敷地と推定される部分にあたっている。

五九年度の調査では、東西、あるいは、南北に一定の指向性を有し、当時の地割の方向を反映すると思われる溝群、及び井戸・土壤等が確認され、このうち、南北方向をとる三条の溝(NR〇一、SD〇一、SD〇五)より、今回報告する資料が出土した。これらの溝は、いずれも、清洲城下町の形成・発展期にあたる一六世紀~一七世紀初頭に存続したと考えができるが、なかでも、竹材等による護岸橋を有するSD〇五が比較的古く、他の二条は、これよりやや新しい段階で、ほぼ併存して機能していた様である。

遺構内からの出土遺物は、いずれも、土器質土器を中心で、瀬戸・美濃焼系製品、中国陶磁器、金属器等もみられるが、とりわけ箸・下駄・曲物・漆碗など、多量の木製品が際立った存在となつてゐる。また、文字資料としては、SD〇一から、底部外面に、赤色漆で、「玉安」と記された漆碗が、SD〇五からは、やはり底部外面に「上せん」「せ□の」等の墨書きを施し、さらに孔を加えた土師質皿が、七点ほどまとめて出土している。

8 木簡の現文・内容

清洲城下町遺跡出土の木簡類は、墨痕を確認し得たものの総数九八点に達したが、断片が多く、部分的にでも解説し得たのは、三分

の一下の三一点」と記す。

(1) 「能持是經者

(100)×(13) 061

・「花押」
・「永□□□〔年々〕」
三月八日」

47×36×4.5 065

「縁果〔報生劇々〕」

(30)×(18) 061

・「久龍久龍」

「無量衆所尊 為□」

(160)×(34) 061

・「久龍久龍」

〔定治〕

長□御れうこんさま□

(132)×(15)×1.5 065

(5) 「久龍久龍」

201×(42)×2 061

これら木簡類のうち、量的に目立つのは、「補註」の断簡と考えられるもの(1)(2)で、全体の約半数にあたる一六点を占めている。筆写されたのは、いずれも法華經の文言と考えられ、全て、NRO一北端部に堆積した植物遺体層中よりの出土であった。また、この他でも、筆塔婆(3)、あるいは野位牌と考えられるもの(4)、等が多く、全体の七割以上が、仏教色の強い遺物となっている。

これ以外では、全長(推定)三二〇程の刀形の柄部分に針書し、墨を入れたもの(5)、あるいは、上端圭頭の木札に花押を記し、裏面に日付を有するものの(6)、同じ文言をくり返す習書らしきもの(5)、等があり、また、一点ではあるが、将棋の駒(6)も出土している。

なお、木簡の解説にあたっては、奈良國立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の全面的な御指導を得た。記して感謝したい。

9 関係文献

静愛知県教育サービスセンター「現状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ」(一九八四年)

(橋本博志)

(8) (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)

110×26×5 061
51×18×1 061

愛知・沓掛城跡



- | | | |
|---|---------------|---|
| 1 | 所在地 | 愛知県豊明市沓掛町東木郷 |
| 2 | 調査期間 | 一九八一年(昭56)一二月～一九八四年一二月 |
| 3 | 発掘機関 | 豊明市沓掛城址発掘調査団 |
| 4 | 調査担当者 | 伊藤秋男・松原隆治・木村光一 |
| 5 | 遺跡の種類 | 城郭跡 |
| 6 | 遺跡の年代 | 一五世紀末～一六世紀 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 豊明市は名古屋市の南東部に隣接する。城跡は北西から南東に向って水田地帯にのびる低丘陵の先端に立地する。標高は二一m前後 |

の平城である。

沓掛城は永禄三年(一五六〇)の桶狭間の戦前夜に今川義元が宿泊したといふ伝承が残されていることで有名である。本城跡に史跡田公園整備計画が、市当局によつて策定されたため、その事前調査として四次にわ

たって、本丸跡と考えられる部分を中心に発掘調査が行われた。調査の結果、本丸跡の周囲には土塁が巡り、その内側に礎石建物が、また礎石建物の下層から、土器・烟管等の甕郭遺構を伴わない一種の居館的性格をもつ獨立柱建物をはじめ、井戸状遺構や、南北の二ヶ所から池と推定される遺構群等が検出された。木簡が出土したのはこの遺構群中の北の池(SG-1)である。木簡の大部分は第三次、四次発掘調査の際、出土した。この池は、東西四m以上、南北四m以上の大きさで、深さは深いところで七〇cmにも達した。池の埋土は黒色の有機質を多量に含むドロ状の單一層で、土質や色調などでは分層できなかった。また、埋土中のさまざまなレベルで出土した土器・陶磁器の破片が接合できる場合もあることから、埋土は比較的短期間に堆積したと考えられる。

埋土中からは、後述する木簡のほか、箸・折敷・曲物容器・漆器・しゃもし・へら・さじ・蓋・桶・下駄・櫛・杭等の木製品が非常に保存の良い状態で出土している。木製品以外に多量に発見された遺物は、地元でつくられた土器類、瀬戸・美濃窓あるいは常滑窓の鉄釉・灰釉・無釉の皿・碗・鉢・香炉・壺・茶入れ等の陶器、中國製の白磁・染付の皿・碗等の磁器がある。さらに、金銀製品として、釘・よろい金具・門金具等、石製品では五輪塔の一部・研石・硯などがあり、その他、食物残滓と考えられる各種の種子・魚骨・獸骨・鳥骨・貝殻等も出土している。要するに、中世の物質文化の

ほぼ総体が一括して出土したものと考えられる点で、本城跡発見の遺物は考古学的にきわめて重要な意義をもつてゐる。

8 木簡の現文・内容

(1)	「○。〔花押〕」	51×29×5.5
(2)	「○。〔花押〕」	52×27×5.6
(3)	「○。〔花押〕」	41×21×3
(4)	「○。〔花押〕」	48×29×3
(5)	「○。〔花押〕」	48×27×3
(6)	「○。〔花押〕」	47×22×3
(7)	「○。〔花押〕」	54×26×4
(8)	「○。〔天文〕」	52×28×5
(9)	「○。〔H〕」	45×27×5
(10)	「○。〔花押〕」	44×28×5
(11)	「○。〔花押〕」	49×29×3
(12)	「○。〔花押〕」	38×20×2
(13)	「○。□」	52×25×5

05	「(花井)」	56×27×5
06	「(花井)」	54×30×5
07	・×やが× ・×也×	(117)×25×5
08	「□□□□□」	(62)×18×5
09	「の」	(117)×25×5
10	〔(花井)〕	(94)×(19)×5
11	〔(花井)〕	(107)×(40)×5
12	〔(花井)〕	(113)×(66)×6
13	〔(花井)〕	(75)×(25)×3
14	・「V□□おいもん」 ・「Vあいもん」	144×12×3
15	「Vくうき」	(49)×15×3
16	・「V〔(花井)〕」 ・「V〔(花井)〕」	(80)×25×3

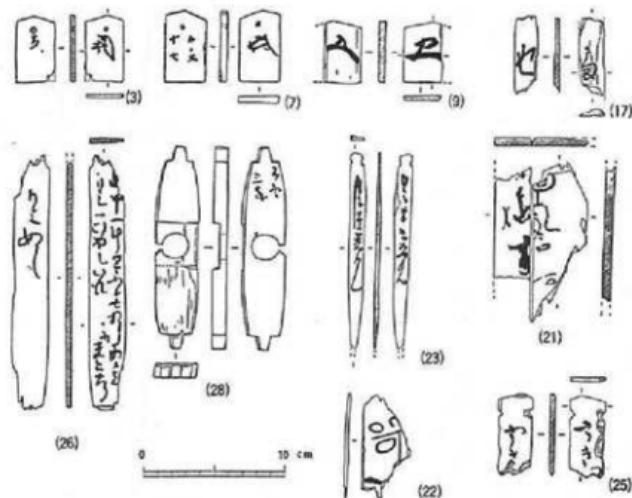
当遺跡から出土した墨書の認められる木簡は以上であり、その形状は短冊形・特模胸形(1)～(6)等さまざままで、草戸千軒町遺跡の分類にもあてはまらないものが多い。詳細な整理を終えれば、さらに増えることも考えられる。また、墨書が認められなかつたが、墨書のあるものと同一の形状をもつ木片も発見されている。例えば五点を数える特模胸形の木片などは、その例である。樹種については、いずれ分析調査をして、同定したいと考えている。(7)、(8)の「天文十七」、「天文」は、おそらく「天文」七年(一五四八)の年号をさすものと考えられる。鷲は系書きに書かれたものである。

9 関係文献

愛知県豊明市沓掛城址発掘調査団『沓掛城址第一次発掘調査報告書』(一九八二年)

同「査掛城址第一次発掘調査報告書」(一九八三年)
 同「査掛城址第三次発掘調査報告書」(一九八四年)
 同「査掛城址第四次発掘調査報告書」(一九八五年)

(伊藤秋男・木村光一)



秋田城跡出土の文字資料集成の刊行

昭和四七年より秋田城の発掘調査を担当してきた秋田城跡発掘調査事務所が、研究紀要の第一集として秋田城跡出土の文字資料—漆紙文書と墨書き土器—を集成し刊行した。秋田城跡から出土した四点の漆紙文書うち、第三六次調査出土の二点については平川南氏の詳細な報告が載せられ、他の二点についても概要が紹介されている。墨書き土器は六四九点全ての一覽表と実測図、及び主たるもの等写真図版が取められ、そのなかには昭和三四・三七年にかけて文化財保護委員会によって行われた発掘調査で出土した墨書き土器五点も含まれている。所在不明の多い同墓掘調査出土遺物についても取り上げられていて有益である。

秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所発行

『秋田城跡発掘調査事務所研究紀要 I 秋田城出土文字資料集成』
(A4版 八八頁 一九八四年九月刊)

〔申込先〕 秋田市寺内字大畠一二 秋田城跡発掘調査事務所内
秋田市遺跡保存会 領価二〇〇〇円 〒三〇〇〇円

愛知・吉田城三ノ丸跡



- 1 所在地 愛知県豊橋市今橋町
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)一二月
- 3 発掘機関 豊橋市教育委員会
- 4 調査担当者 小畠耕孝
- 5 遺跡の種類 城跡及び集落跡
- 6 遺跡の年代 八世紀～八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

吉田城三ノ丸跡は、東三河地方の平野部を流れる豊川が、支流の朝倉川と交わる左岸台地上に位置する標高約10mの地区にある。

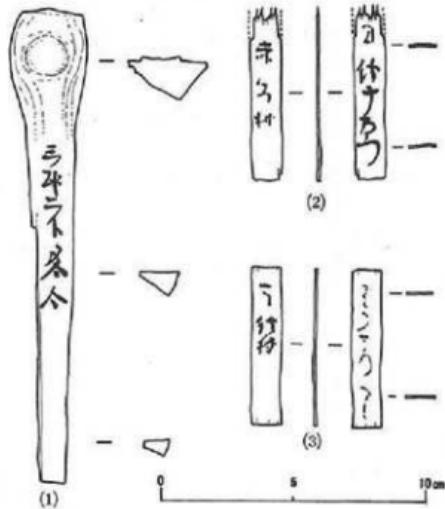
この地域は豊橋公園内にあたり、眼下に豊川が形成された沖積平野を望むことができる。

当三ノ丸跡の調査は、一九八五年度を予定とされる。

（前）教地内に仮称「三ノ丸会館」の建設が決められたため事前に調査を実施したものである。本三ノ丸跡内では市

立美術博物館などの建設にともない実施された調査で、弥生時代から江戸時代にかけての遺構が検出されており、本丸跡も含めた遺跡の総面積は三三〇、〇〇〇m²である。

三ノ丸跡に接して同台地上、東約100mには弥生時代の泡垂遺跡が存在し、それより五〇〇mには古墳時代中期の東田古墳が築造されている。また、西方約一kmには縄文時代前期の石塚貝塚が存在する。



発掘調査の結果、奈良・平安時代の土壌、中世の溝及び柱穴、江戸時代の溝・土壌・柱穴・蔵の礎石などを検出した。木簡は江戸時代後期の土壌から、木製品と共に計八点出土している。また、奈良時代の土壌から「大」・と判読できる墨書き器が出土している。

8 木簡の釈文・内容

出土总数八点の木簡の内、判読できるものは二点であった。

(1) 「三斗一升五合合」

160×30×17

(2) 「□鳥十郎左衛門」

・赤□村

(3) 「□鳥村」

(67)×12×2

61×12×2

木簡は、現存する吉田城の絵図面にのる安政四年(一八五七)より米蔵が存在した地点から出土したものであり、米蔵移転に伴いその後造られた土壌に荷札が投棄されたものと考えられる。

(小畠耕家)

静岡・秋合遺跡



(家山・静岡)

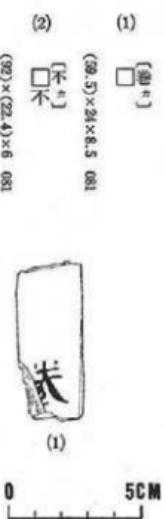
一九七九年以來、秋合遺跡の性格把握と範囲確認のための調査を実施してきたが、今回の第四次調査によ

- | | |
|-----------------|---|
| 1 所在地 | 静岡県藤枝市南新屋字白山 |
| 2 調査期間 | 一九八四年(昭59)一月～一九八五年二月 |
| 3 発掘機関 | 藤枝市教育委員会 |
| 4 調査担当者 | 八木勝行・始木隆夫・磯部武男 |
| 5 遺跡の種類 | 官衙跡 |
| 6 遺跡の時代 | 奈良時代～中世 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺跡の概要 | 秋合遺跡は、国指定史跡志太郡衙跡より低丘陵を挟んで東側に隣接する水田地に存在する。一九七八年の調査によって掘立柱建物や井戸が検出され、出土した三七点の墨書き器の内容から志太郡衙跡ときわめて密接な関係にある遺跡として注目された。 |

1984年出土の木筒

つて奈良時代の比較的大規模な掘立柱建物、土器類や木製品類と共に二点の木筒を発見した。木筒が出土したのは、遺跡の南西隅で、当時の低湿地に面した微高地の縁部である。(1)は遺物包含層中より、(2)は掘立柱建物(SB〇四)の柱穴埋土中より出土した。

8 木筒の积文・内容



二点共に両端を折られた細片であり、字数も少いので内容を何うことは困難であるが、(2)は「不」の文字が二字連続する可能性もあり、習書木筒の一部とみられる。

9 関係文献

藤枝市教育委員会『秋合遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(一九八五年)

(藤部武男)

静岡・郡遺跡



- | | |
|-----------------|---|
| 1 所在地 | 静岡県藤枝市立花二丁目 |
| 2 調査期間 | 第三次調査 一九八四年(昭59)一〇月～一九八五年一月、第四次調査 一九八四年一一月～一九八五年一月 |
| 3 発掘機関 | 藤枝市教育委員会 |
| 4 調査担当者 | 八木勝行・鈴木隆夫・磯部武男・池田将男 |
| 5 遺跡の種類 | 集落跡・官衙跡 |
| 6 遺跡の年代 | 弥生時代中期～平安時代・中世 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 都遺跡は、旧東海道に沿って延びる藤枝市街地(宿場)から少し東側にはずれた立花地区に位置している。
額戸川のつくる低湿地に面した冲積扇高地の辺縁部に広がる弥生時代中期から中世に及ぶ大規模な複合遺跡として知られ、その名称 |

の示すとおり、遺跡の分布地付近には「郡」・「西益津」などの地名が残されているところから、古くより駿河国益頭郡衙の所在地として有力視されてきた。しかも、多数の墨書き土器の出土によって遺跡の内容が明らかになった史跡志太郡衙跡（宇子ヶ谷遺跡）とは瀬戸川を挟んでわずか二・五kmほどの隣接した位置にあるところから、両都の在り方をとらえるうえでも注目される遺跡となっている。

遺跡は、東西六〇〇m、南北四〇〇mの広範囲に及ぶものと推定され、周辺部まで開発が迫ってきていたところから、遺構の広がりと性格を把握する目的で一九八一年以来発掘調査を実施してきている。すでに第二次調査（昭56年）において「益厨」と記した墨書き土器を発見するなど、予想どおり益頭郡衙と深く関連するものであることが物証によつても明らかになった。こうした中で第三次（立花D地区）調査・第四次（立花F地区）調査においても、「益厨」と記した墨書き土器とともに木簡が出土し、さらに郡衙跡という推定を裏付けこととなつたものである。

一 第三次調査（立花D地区）

遺跡のほぼ中央部を横断する市道西益津一四五号線拡幅工事に伴つて事前に巾一m、長さ一三〇mにわたつて発掘調査を行つた結果、多くの住棟・礎板とともに一・四m×一・六mの掘形をもつた井戸（SE〇〇六）を発見した。井戸は杉の厚板による五五〇四方の井戸枠を丁寧に組み、三七四段（高さ八〇cm）に積み上げている。

木簡は、この井戸の覆土中より鉄斧、横櫛などとともに一点出土している。

井戸周辺部には掘立柱建物群の存在が予想されるが、調査範囲の関係から規模や配置状況まではとらえられない。

二 第四次調査（立花F地区）

立花D地区より北側へ約一五〇m離れた地点で小規模な農地改良工事が行われ、耕作土を取り除いたところ遺物が発見されたため緊急に発掘調査（四八〇g）を実施した。

遺跡の範囲としては北端部に近い位置と予想されたが、表土下四〇cmほどの浅い部分で弥生時代から奈良時代に及ぶ六条の溝状遺構が発見された。

このうちし字形に折れまがつて延びる二条の溝（SD二六・二七）は、それぞれ幅一m、深さ五〇cmほどの規模で、中に腐材の板や杭で止めや縁部の補強を施して長期にわたつて水路として使用していくことが確認された。

水路の中からは投棄された遺物が多量に出土し、墨書き土器・木簡・木札を含めて、土器・木製品（油物・皿・槽・ヘシ・紡錘具・錐・刀子）・祭祀具（葦車・劍形・刀子・人形・馬形）・土馬・手捏土器・土鍾・砥石など種類も多く認められた。

出土土器の年代からみて、溝SD二七は、八世紀前半代にほとんど埋没し、その後、八世紀中頃に、ほぼ同じ位置にSD二六が掘り

なおそれ、八世紀末頃まで使用されていたものと考えられる。

木簡はSD一七から一点、SD一六から一三点出土しているが、

板縫に転用されたものを除いて、ほとんどが付札とみられる点で

特徴をもつていて、また、SD一六からは墨書き土器が二六点（修理中）出土し、「益闕」が八点と多くを占めている。「益大」・「少領」

などの郡司の官職名に関わるものも含んでおり、志太郡衙出土の墨書き土器群に共通する内容をもつ。このことからも、発見された区域

が駿河国益頭郡衙に含まれることは明らかで、中でも水路によって区画された範囲には、厨家や貢進物資の管理などの機能を果した施設があったことが推測される。

8 木簡の积文・内容

第三次調査（立花D地区）

#~~木筒~~ #~~木筒~~



(177) x 40 x 2 061

中央部を穿孔した板の左側に寄せて記載され、文字の大きさや列も不揃いで文意も解しにくく。習書ないしは呪符の可能性もある。

第四次調査（立花E地区）

#~~木筒~~ #~~木筒~~

- | | |
|--|--|
| <p>(1)</p> <p>(177) x 40 x 2 061</p> | <p>(2)</p> <p>(54) x 15 x 9 039</p> |
| <p>(3)</p> <p>・ □六日 □牛等 □七月十一日丁 □ [女] (89)</p> <p>(89)</p> | <p>(4)</p> <p>[益] [益] [益]</p> <p>92 x 49 x 8 061</p> |
| <p>(5)</p> <p>下 矢田マ [子] 毛人</p> <p>(177) x 24 x 3 059</p> | <p>(6)</p> <p>一月廿八日</p> <p>282 x 25 x 8 053</p> |
| <p>(7)</p> <p>□田人</p> <p>(93) x (22) x 5 061</p> | |

(8)

・
・
□
〔24×5〕

260×28×5 033

(9) 「戸主□□□道

(135)×18×3 051

(10) 進□□

(221)×41×3 081

・
□
〔升々〕
五
□
□

(111)×(15)×2 019

(11) □ □ □ □

・
□ □

(105)×(18)×4 061

(12) □ □ □ □

・
□ □

(129)×(13)×4 081

(13) □ □

・
□

265×24×3 063

(14) □□□

95×25×3 032

時

(八木勝行)

(1)は、郡里制下における米の貢進付札とみられるもので、里名と人名の間に「五戸」が記入されており、五戸（戸）を代表して貢進したことを表わしたものか。裏面の「五斗」の上は二文字で「白

木」である可能性もある。郡衙設階における初期の徵稅形態を示すものとして興味深い。和名抄に益頭郡物産郷がある。

(3)は月日を中心にして記録された木簡を切断して転用し、裏面に材を横方向にして裸馬を描いた板絵馬。形態や粗い筆運びで描く点は、伊場遺跡出土板絵馬に共通している。

(5)は、上端を欠くが、ほぼ原形に近い付札とみられる。「下」に統いて人名のみを記載したものであり、上位機関からの物資等の伝達もあったことを物語るものか。(6)・(7)・(9)はそれぞれ人名のみを記入した付札で、郡衙内での物品チェック後処分されたものであろう。

他に墨痕の認められない付札状をなした小型木札が六点出土している。

9 関係文献

藤枝市教育委員会『郡遺跡発掘調査報告』—昭和58年度立花地区の調査— (一九八四年)

静岡・神明原・元宮川遺跡

しんめいばら もとみやがわ

所在地 静岡市水上・西大谷

調査期間 一九八三年(昭58)四月～一九八五年三月

発掘機関 静岡県埋蔵文化財調査研究所

調査担当者 栗野克己・小島日出一・成島仁

遺跡の種類 祭祀遺跡・集落跡

遺跡の年代 繩文時代～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

神明原遺跡と元宮川遺跡とは、南と北に約500m離れた別々の遺跡として登録されていたのであるが、最近の分布調査の結果遺跡

の範囲は、両遺跡を包括するよう東西約0・5km、

南北約1kmとなり、静岡市

内では最大規模の遺跡とな

った。

静岡平野は、安倍川の扇

状地の発達により形成され

(静) ているが、その扇状地の東

南末端部を、南北に流れる



大谷川流域に、本遺跡が位置する。遺跡の西側は北から有東遺跡や天神森遺跡から続く微高地が南へのびており、その東縁に接する泥炭層の発達した低地との変遷線に旧大谷川流域が蛇行している。登呂遺跡は本遺跡から西へ約800mのところにあり、前記微高地の西側斜面に立地している。

一方本遺跡の東側には有度山丘陵が広がり、山麓には、勝河国分寺の可能性が指摘されている片山廃寺をはじめ、縄文・弥生の遺跡群や、多くの古墳群が分布している。

神明原・元宮川遺跡の調査は、大谷川の河川改修工事にともなう事前調査である。現在の河道は昭和一七年に行われた、三菱の軍需工場周辺の排水目的として、蛇行する大谷川を直線的に改修したものだが、その折にかなり破壊されている。朝鮮半島から連れてこられた人達の強制労働により工事が行われたのであるが、ひきつづき翌一八年には、住友のプロベラ工場の造成土の掘削により登呂遺跡が発見されたことは周知のことである。

遺跡は、海拔五～八mの低地にあるが、旧大谷川の両岸に広がる微高地には弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代・中・近世にかけての堅穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝・土塁・橋跡・配石遺構・粘土探査跡など長期間にわたる生活の痕跡が発見される。弥生時代の丸木舟と櫓はこの遺跡の南端部の砂丘・川状の低地から発見されたもので、有東遺跡に代表される弥生時代中期の活動

範囲の広がりが確認され、注目されている。この遺跡の最大の特徴は旧大谷川の流路跡の発見にはじまる。旧大谷川の流路は現在の景観と異なり、大きく蛇行の跡をみせている他、川幅が一〇〇mあまり、深さ四mあまりに達する箇所もみられる。この旧大谷川の堆積土層からは古墳時代後期から奈良・平安、中世に至る多量の祭祀遺物が発見され、古代から中世にかけて大規模な「水辺での祭り」が行われていたことが確認された。

これらの祭祀遺物群は質・量とも豊富であり、從來律令的祭祀形態の特徴的遺物の一つと考えられていた木製人形などの出現時期が古墳時代後期にまでさかのぼる可能性もでてきた。また、馬に関する資料が非常に多くみられ、馬の骨や馬の形代である土製品や木製品が出土している。人形にも土製品と木製品がみられる。他に斎車・木製鏡・刀やト骨・鏡・「神」の文字が書かれた土器・縁釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁などが発見されている。

木筒はいすれもこの旧大谷川流路から発見された。一号木筒は西大谷二区の流路から発見されたのであるが、この部分では單一の時期に限定されない遺物群が発見されており、伴出遺物による年代観は明確ではない。二号・三号木筒は西大谷三区の流路から発見されたもので、平安時代・中世の遺物が主体であり、下限は一四世紀頃と考えられる。

8 木筒の叢文・内容

(1) 「他田里戸主字刀マ真酒」

110.5×17×4.5 651

西大谷二区E四三七一四グリッドの旧大谷川流路内砂礫層から出土した。上端は角型、下端は串状だが先端を切り落としている。側面から裏面にかけて間隔をあけた三本の刃裏による線がみられる。板目板の木表に墨書きされ、表面は丁寧に削り面調整している。年代は「他田里」とあることから七一五年の郷里制施行以前である。

一〇世紀前半に成立した「倭名類聚抄」によれば、当時の駿河国有度都には内屋(ウツノヤ)・間壁(マカイ)・他田(オサダ)・新居(ニイ)・託美(タクミ)・嘗見(ナメミ)・会星(アフボシ)の七郷があり、その一つの他田に該当する。「戸主」である「字刀マ」という氏については、「日本書紀」大化二年三月辛巳条の「菟粟人」・天平一〇年「駿河國正税帳」の「有度部黒背」(駿河國安倍軍田少税)や、『万葉集』卷二〇一四三七の「有度部牛麻呂」(駿河國上・助人)、また平城宮出土木筒の「駿河國有度郡嘗見有刀部古方呂調堅魚十一斤十兩」などがあり、同氏の関連史料がふえた。

「き 南無阿弥□×」

220×22.5×2.5

西大谷四区Q二三グリッド第八トレンチの暗灰色粘土層から出土した。旧大谷川流路内である。板目板の木裏に墨書きがあり、上端を圭頭状に、下端を尖らせていく。一字目は梵字の一尊種子・バーン



(2)



(1)



(3)

「金剛界大日」を表わす文字のくずし字と考えられる。以下「南無阿弥」と思われるが、下の文字がはつきりしない。

(3) 「天定 鬼 □」

174×41×2.5

9 関係文献
栗野克己・小堀日出一『大谷川一』(『静岡県文化財調査研究』所調査報告 第五集) 一九八四年)
(栗野克己)

西大谷四区R二一ダリッドの旧大谷川流域内から出土した。上端は圭頭状、下端は尖らせている。表面を丁寧に面調整し、板目板の木表に墨書きしている中世の呪符木簡である。上に「天定」と二字をおくが「足」の字は「ニ」の部分はみえるが「ヒ」の部分はあまりはつきりしない。その下に「鬼」の字を二文字横にならべて書いている。しかし、全体のバランスからいえば、右側にもう一字あってもよいだろうが、墨痕はみえない。真中の鬼の字の下に一字あるが判読しがたい。

埼玉・小敷田遺跡



- 1 所在地 埼玉県行田市大字小敷田字桜町他
- 2 調査期間 一九八三年(昭58)七月～一九八四年三月
- 3 発掘機関 勝利埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 4 調査担当者 田中正夫・高崎光司・吉田 稔
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期、古墳時代前期、八世紀～九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 埼玉県の西部秩父山地を源とする荒川は、県北部を東流し、熊谷市附近に至って流れを南東方向に転じ、東京湾へと向う。小敷田遺跡は熊谷市周辺に発達したいわゆる荒川扇状地の東側氾濫原、自然堤防地域に立地する。遺跡の標高は二〇二一mであり、北西から南東へ緩やかに傾斜している。関東平野の中央部に近いこの地域では、関東盆地運動と呼ばれる地盤の沈

下現象がみられる。遺跡は現在水田下に埋没し、平坦な低湿地帯に立地するが、古代では標高もやや高く、地形の変化にも富み、水田利用部分も限られていたと思われる。小敷田遺跡と隣接する池上遺跡では、弥生時代中期(須和田式)の集落跡と、平安時代の掘立柱建物跡などが検出されており、古代における環境と現在の環境の違いをうかがわせる。また周辺は、荒川水系の伏流水の影響から地下水位が非常に高いため、遺跡からは多くの木製品が出土した。

小敷田遺跡の発掘は、一般国道一七号熊谷バイパスの建設工事に伴うもので、建設省関東地方建設局からの委託を受け、勝利埼玉県埋蔵文化財調査事業団が一九八三年(昭58)から着手しているものである。遺跡名は小敷田遺跡としているが、遺跡の範囲は、行田市小敷田から熊谷市池上にかけてであり、一九八一年度に県立さきたま資料館により調査された池上遺跡と接する。発掘調査区が道路用地であるため延長は一・三kmに及び、総面積約三六、〇〇〇m²である。遺跡には道路用地を横断する市道や水路により便宜的にA～F区の呼称をあたえており、一九八三年度にA区、一九八四年度にD・E・F区の上り車線側約半分を調査した。一九八五年度に入りB・C区を調査している。木簡が出土したのはA区である。

A区では、弥生時代中期の住居跡三棟、奈良時代と思われる二間×三間の棟柱の掘立柱建物跡一棟、時期不明の二間×三間の掘立柱建物跡一棟、弥生時代中期・古墳時代前期・八世紀～九世紀代の土

壇合せて約五〇基・溝約二五条が確認されている。また遺構の検出面上に厚さ一〇～三〇mm程の、八世紀～九世紀頃の遺物包含層を形成していた。

木簡が出土したのは、総柱の掘立柱建物跡の近くで検出された一九及び五一号土塙である。二九号土塙は二・〇m×二・一m、深さ六五cmの不整円形、五一号土塙は四・七m×二・一m、深さ五〇cmの不整円形である。ともに覆土には多量の植物性繊維と木片が認められ、覆土自体もよく似ていた。木簡と共に伴う遺物には、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・高台付杯・皿・蓋がある。また五一号土塙では備・曲物、大足の杵、弓を伝用した棒状の穀品等多くの木製品がある。二九号土塙では砧状の製品などがあった。出土土器から二基の土塙間に大きな時期差はない、ともに八世紀の初頭前後と考えられる。A区では他に、八世紀～九世紀代と思われる溝・土塙・井戸跡・遺物包含層から出土した須恵器杯や蓋に墨書が認められるが、これらは二九号土塙、五一号土塙から出土した土器よりも時期は新しい。墨書は、肉眼で判断できる限りでは次のように読める。蓋に書かれたものには「大」・杯底部に書かれたものには「山」・「若」がある。杯体部に書かれたものには「丸」「束」が各一個体ずつあり、その他二文字書かれているもの等合計一点確認されている。

・□乎善間賜欲白之
・□直許在□□代等言而布四枚乞是寵命座面

(400)×23×5 019 *

(2) 「九月七日五百廿六□□□
・「卅六次四百八東□千□百七十
少稻一千五十五東」

」

155×23×2 011 *

(3) •□□比□□百五十束□
•□□六束

」

(103)×(21)×3 011 *

(4) 「十一
十六日
十六日」
□味味」

」

350×57×6 011 *

(5) 「今貴大徳若子御前領首拝白云
・「直上臺廿五絞萬八立薦二枚合百十枚」

」

378×25×3 011 *

(6) 226×(20)×4 081 *

・□□□墨保「□□」

(175)×21×4 081 *

(8) 「万凡物應□

(220)×43×4 081 *

(9) □連通首連

(187)×19×19 081

(1)～(4)は二九号土壙から出土したもので、他は五二号土壙からの出土である。(1)は上部が焼失しているが書簡文のようである。裏面の「□」は旁が「也」と判読できるが、偏の部分が焼けていて判読はできない。(2)は箱の東数を集計したものであるが、「少箱」とはどういう箱かは解らない。(4)には、积文に記した以外にも、各所に墨痕らしきものがみられる。(5)は「云」で終っているため、書簡文の始めの部分の手本のようなものと思われる。また「御前」という表記が使われるのが、藤原宮出土の木簡に例が多いことは、この木簡が書かれた年代を考えるうえで大いに興味があるものである。(6)の「絞薦」「立薦」がどのようなものか不明であるが、これらの送り状のようなものの一部かと考えられる。(7)の「墨侯」についても不明である。(9)は棒状の物の一面を削りその面上に書かれているもので、習書と思われる。

9 関係文献

朝堺玉県埋蔵文化財調査事業団『年報4 昭和五八年度』(一九八四年)

(田中正夫)

滋賀・大津城跡



(京都東北部)

- | | |
|-----------------|---|
| 所在地 | 滋賀県大津市浜大津一丁目 |
| 調査期間 | 一九八三年(昭58)二月／一九八四年一月 |
| 発掘機関 | 大津市教育委員会 |
| 調査担当者 | 松浦俊和 |
| 遺跡の種類 | 城跡・町屋跡 |
| 遺跡の年代 | 室町時代末期・江戸時代 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 大津城は、大津市下阪本にあった坂本城廢城後、同市浜大津の湖辺一帯に築かれた水城である(天正一四年頃、一五八六)。だが、関ヶ原合戦後、天下人となつた徳川家康は、大津城の立地が周囲の丘陵から俯瞰される状況にあることを嫌い、同地よりやや東に寄った勝所の地に新たに勝所城を築いた(慶長六年、一六〇一)。これに伴い、大津城はわずか一年余りで廃城となり、 |

これ以後、大津の町は北陸・東國からの物質が集まる商業都市として大いに繁栄することになる。町の景観は一変し、三重にめぐらされていた堀は埋め立てられて宅地となり、わずかに湖に面した舟入り(船)に城の名残りをとどめていた。

この舟入りのひとつ、大津城の東側外堀にある大橋堀(風呂屋閑)の推定地の一角で、一九八三年一〇月頃にビル改築計画がもたらされたため、大津市教育委員会が事前に発掘調査を実施した。

大橋堀については、元禄八年(一六九五)に大津代官所に提出された各町絵図のなかの橋本町絵図に詳しく記載されており、調査地付近に大橋堀西側の南北方向にのびる石垣が推定されていた。調査の結果、当初の予想どおり、大橋堀西側の石垣(その一部に、堀の台座にあたる弯曲した箇所もあった)を南北方向に一六田余り検出した。そ

して、堀にあたる部分の埋土中から江戸時代後半期の多量の陶磁器(伊万里・信楽・瀬戸・備前・常滑・京窓など)・木製品(漆器碗・桶・曲物・箸・浮城鉢・下駄など)・土製品(人形・埴輪・泥面など)に混つて三〇点余りの木簡が出土した。この木簡群は保存状況が非常に悪く、完形品はほとんどなかった。そして、わずかな例を除いて大部 分が荷物に付けられた木札類と考えられ、差出人や受取人とみられる商人名・地名などが多く記されている。

8 木簡の軽文・内容

(1) 「**天保十三年正月**」

「**天保十三年正月**」

157×51×9 651

頭部を円形に削る札型の位牌で、牌身下部は折損している。表には梵字「**天**」を頭書し、統いて或名の一部かと思われる「願迎」を墨書きする。裏には「天保十三」「寅十二月」の日付があり、命日を記したものと考えられる。

(2) 「**三国両替屋長十郎殿**」

□□□□□

庄次郎出

163×35×11 911

表にある「**三国**」は、越前国三国(福井県坂井郡三国町)のことと思われ、同地の両替屋長十郎なる人物に宛てたものと考えられる。裏には差出人の名があり、その右肩に判読不能の字が三字分認められるが、おそらく地名か屋号が書かれていたと思われる。また、表の宛名の左下及び右上に文字が認められるが判読不能。

(3) 「**小松屋栄治郎殿**」

○○○○○

池田屋勘兵衛殿

山形屋甚五郎殿

183×75×9 611

表に三名の商人の名前があり、その上に墨書きをあらわす「**名**」の

印が書かれている。なぜ三名の名前が連記されているのか不明だが、目的地へ荷物を送る際に関係する間屋のすべてを記したとも考えられる。しかし、この三名がどこの商人かはまったくわからない。

(4)

④ 伊賀屋弥兵衛殿

「本引金丸□[兵衛殿入]

×ヶ

」

147×48×7 011

(6) ×□ □□□□□
×□ 源兵衛^殿

□□」

(122)×(35)×5 019

木簡の表裏とも平滑に仕上げられることなく、剥ぎ取り時のみで、木目の凹凸が激しい。右の行の五文字については、人名の可能性(□□□□兵衛、最初の字は末偏と考えられる)が強い。

(7) 「辻田」

木簡の表裏とも平滑に仕上げられることなく、剥ぎ取り時のみで、木目の凹凸が激しい。右の行の五文字については、人名の可能性(□□□□兵衛、最初の字は末偏と考えられる)が強い。

(8) 「山本村三郎平」

145×54×6 011

表に屋号をあらわす「④」の印とその名「伊賀屋弥兵衛」が書かれ、その右側にも文字が認められるが、残りが非常に悪く判読不能。裏にも両人と思われる名前が書かれているが、その前の二字「本引」が何を意味しているのか不明。

(5)

×□殿 カタタ

(132)×(30)×5 081

残りが非常に悪く、全体の状況は把握ないが、上に宛名とみられる二名の名前(いずれも不明)を連記し、その下に「カタタ」の字が見える。これは大津市の北部に位置する「堅田」と考えられる。さらにその左側にも二字認められ、判読は困難だが「新蔵」と読むことができるようである。従ってこの木簡は、堅田に居住していた新蔵なる人物から二名の人物に宛てられたものであったと思われる。

滋賀・上永原遺跡

及ぶ遺構が検出された。木簡はこの掘削に面した浅い溜状の遺構内より出土した。

1 所在地

滋賀県野洲郡野洲町大字上屋

2 調査期間

一九八一年(昭56)四月~七月

3 発掘機関

野洲町教育委員会

4 調査担当者

吉川和則

5 遺跡の種類

集落跡・城跡

6 遺跡の年代

平安時代末~江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

上永原遺跡は、国鉄野洲駅より北東へ二・五km、旧家棟川右岸、標高約90mの自然堤防上に立地する。遺跡内には中世佐々木氏所

縁の永原氏居城、上永原城

が存在するほか朝鮮通商使往来の道である朝鮮人街道を隔てて永原御殿跡や常楽寺遺跡などが広がっている。



(近江八幡)

城掘削および中世~近世に

8 木簡の現文・内容

(1)

・「与一兵衛 千崎弥五郎 □□ 黒口
忠臣蔵 五段目 □□ □□ 黒口
□九郎 □高平 之の笠」

・「手 播州 小屋 □□ □□ □□
きく 播州 □□ □□ □□」

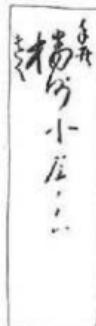
234×65×7

歌舞伎忠臣蔵五段目、山崎街道の場を表したものである。「千崎

弥五郎」は千崎弥五郎を指し、「鉢」は鉢碗、「九郎」は定九郎であり、「高平」は早野勘平を指すものであろう。また与一兵衛の名や、山崎街道での鉢碗、蓑笠といった勘平の姿を示す表現も見られる。周辺には戦前まで野良小屋という野外芝居が盛んであったことから、「播州小屋」も播州小屋と読み、芝居を公演する一座の固有名詞とも考えられる。また木簡について

ては、忠臣蔵上演の際落書の札として用いたものではなかろうか。
(近江八幡)

(進藤 武)





(近江八幡)
跡が広がっており、調査の
跡が広がっており、調査の

滋賀・野々宮遺跡

- 1 所在地 滋賀県野洲郡野洲町大字富波甲字殿町・野々宮
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)七月~一九八五年三月
- 3 発掘機関 野洲町教育委員会
- 4 調査担当者 進藤 武
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代前期~古墳時代前期、古墳時代後期~飛鳥時代、平安時代~室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

野々宮遺跡は、大岩山丘陵より西へ約〇・七km下った、標高九三〇~九八〇mの冲積地に位置する。一九八四年、当該地に約六二・五〇〇畝を対象とする宅地造成が計画され、七月より試掘調査並びに一部発掘調査を実施した。この地は当初より弥生時代後期から中世を主体とした遺

結果も、ほぼ全城より同時代を中心とした遺構・遺物が確認された。木簡は、対象地の南西部、朝鮮人街道に最も近い調査地点の井戸内より出土した。井戸は伴出遺物に乏しいが、埴底板、土師器片が見られ、隣接地点からは室町時代中期と考えられる獨立柱建物、溝、土壤を検出しており、井戸も凡そ一五世紀中葉以前に機能していたものと考えられる。

8 木簡の篆文・内容

(1) 「忠」

110×(22)×1

赤外線テレビにてかすかに「忠」の文字が判読できた。木簡の周囲には墨線があり、その墨線にそって整形した可能性もある。反りの方向が逆であるが、桧扇の骨板に類似している。
(進藤 武)

滋賀・野瀬遺跡



(近江八幡)

遺跡の年代
弥生時代中期～平安時代末期
遺跡及び木簡出土遺跡の概要
琵琶湖東岸に流れ込む日野川と、その支流である佐久良川との分岐点より、南五〇〇mに位置する当遺跡は、白鳳寺院跡である宮井廃寺跡の周辺に広がる集落跡である。

○〇〇mについて発掘調査
寺跡の北部を中心約一五
が行われた。

その結果、弥生時代中期
から平安時代末期に至る、

- 1 所在地 滋賀県蒲生郡蒲生町大字宮井字野瀬
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)四月～二月
- 3 発掘機関 蒲生町教育委員会
- 4 調査担当者 北川 浩
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期～平安時代末期
- 7 遺跡及び木簡出土遺跡の概要
琵琶湖東岸に流れ込む日野川と、その支流である佐久良川との分岐点より、南五〇〇mに位置する当遺跡は、白鳳寺院跡である宮井廃寺跡の周辺に広がる集落跡である。

木簡は、井戸より汲み上げた水を濾めたと考えられる搾鉢状を呈する大型土壙から、一〇世紀代の土器類と下駄・曲物・櫛・建築用材などの木製品とともに出土した。この他に、井戸跡から出土した木製底部外面にも判読できないが三行・二〇数字の墨書きがある。

8 木簡の訳文・内容



(北川 浩)

木簡研究 第五号

卷頭言——木簡史の研究について——

関 晃

一九八二年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 白
寺遺跡 藤原宮跡 山田寺跡 阿部六ノ坪遺跡 長岡京跡(1)
長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 長岡京跡(4) 仁和寺南院跡 大坂城跡
梶子遺跡 道場田遺跡 野畠遺跡 穴太遺跡 下野國府跡 下野
國府跡寄居地区遺跡 長原東遺跡 多賀城跡 扎田柵跡 日野川
朝宮橋下流 横町遺跡 出合遺跡 江井遺跡 助三畠遺跡 肩脊
堀の内遺跡 草戸千軒町遺跡 田村遺跡 高畠庵寺 藤田遺跡
一九七七年以前出土の木簡(五)

藤原宮跡

字調査資料としての平城宮木簡

——古事記の用字法との比較を方法として——

平城宮出土の衛士関係木簡について

木簡とコンピュータ

書評・『草戸千軒——木簡——』

小林 芳規
鬼頭 清明
田中 琢
水藤 真

藤原宮跡

価値 三五〇〇円
■四〇〇円

滋賀・尾上遺跡

1 所在地	滋賀県東浅井郡湖北町尾上
2 調査期間	一九八四年(昭59)七月~九月
3 発掘機関	滋賀県教育委員会・飼滋賀文化財保護協会
4 調査担当者	兼康保明・奈良俊哉
5 遺跡の種類	湖底遺跡
6 遺跡の年代	平安時代前期
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	尾上遺跡は、余呉湖に源を発し南流する余呉川が、神奈備山で知られる山本山の裾野で大きく西へ方向を変えて琵琶湖に注ぐ河口部の南側に位置している。付近には葛籠尾崎湖底遺跡や尾上浜遺跡、今西湖底遺跡、延勝寺湖底遺跡などの湖底遺跡が集中して存在しているところである。調査は水資源開発公団による海岸堤管理用道路建設に伴う事前発掘調査として実施した。

(竹生島)

尾上遺跡は、余呉湖に源を発し南流する余呉川が、神奈備山で知られる山本山の裾野で大きく西へ方向を変えて琵琶湖に注ぐ河口部の南側に位置している。付近には葛籠尾崎湖底遺跡や尾上浜遺跡、今西湖底遺跡、延勝寺湖底遺跡などの湖底遺跡が集中して存在しているところである。調査は水資源開発公団による海岸堤管理用道路建設に伴う事前発掘調査として実施した。

今回の調査は、前年度に湖北町教育委員会が調査を行った地区の西侧である。調査の結果、琵琶湖の水面より約三m低い、標高八・五mの高さで、平安時代前期の遺物包含層を検出した。この遺物包含層からは、人形八点・布帛九点・折敷一点等が出土した。遺物は木製品がほとんどで、土器はごくわずか出土しなかった。なお、木製品は散乱した状態で出土した。また、今回報告することになった幅の狭い板状の木簡と墨書きされた馬形代もこの包含層より出土したものである。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「□黒毛□」

148×(28)×(5)

馬形代のほぼ中央に「□黒毛□」の四文字が書かれていることが、赤外線写真によつて判明した。二・三文字目は読めるが、一・四文字目は判読しかねるものであった。なお、頭部と考えられる部分には馬の絵が描かれていた。

幅の狭い板状の木簡については現地では墨の残りがある様に思えたため、奈良国立文化財研究所に鑑定を依頼したところ、墨痕はあるが判読出来なかつたということであつた。

(奈良俊哉)

滋賀・北方田中遺跡

- 
- 1 所在地 滋賀県坂田郡山東町北方
2 調査期間 一九八四年(昭59)九月~一月
3 発掘機関 滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会
4 調査担当者 兼藤保明・奈良俊哉
5 遺跡の種類 集落跡
6 遺跡の年代 平安時代初頭~鎌倉時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
北方田中遺跡は、伊吹山の南に広がる小さな平地と丘陵よりなる山東町の西側の部分で、長浜市との町境になる横山通山のほぼ中央の東側に位置している。一九八四年に当地域で農業整備事業が実施されるところから、同年九月より試掘調査を行った。その結果、木簡の存在が確認されたため、引き続き発掘調査を実施した。
(長浜)
この付近には、前方後円

墳で知られる瓢箪山古墳や円墳で横穴式石室の一部が露出している塚本古墳などがある。また、分布調査の結果、南北に走る県道を挟んだ東側には、奈良時代から平安時代のものと考えられる遺物散布地があり、さらに北へ約1km程のところでも、当遺跡と同じ時期と考えられる遺物包含層が確認されている。

今回の調査の結果、平安時代初頭~鎌倉時代までの掘立柱建物が數十棟・南北方向の溝一条・四脚門跡・井戸三基・道路状遺構一条などが検出された。これらの遺構の中で、木簡は遺跡の北にある鎌倉時代(一二世紀)の井戸の中より出土した。

8 木簡の积文・内容

(1) 「水水水水水水
水水水水水水
水水水水水水
急々如律令
(225)×33×3.02

三行各六文字、計一八文字の「水」の字と、「急々如律令」の文とを組み合せてることや、井戸の最下層から出土したことなどから、井戸の水がすばやく満つるようにと祈願する意味をもつ呪符木簡とも考えられる。

(奈良俊哉)

滋賀・永田遺跡

ながた



- 1 所在地 滋賀県高島郡高島町大字永田
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)一〇月~一二月
- 3 発掘機関 滋賀県教育委員会・鈴滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 高島町教育委員会
白井忠雄
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代~平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 永田遺跡は、本遺跡の北側を西から東に流れ琵琶湖に注ぐ鴨川が形成した沖積平野に立地する。

本調査は、は場整備事業に伴うもので、永田城の土壘状の遺構保存のために、その広がりを確認する目的で実施された。永田城は、近江の中世において守護職として台頭していた佐々木

- (彦根西部)
鈴滋賀県文化財保護協会
近刊)
- (1) □田廣濱
秦掠人酒公秦廣輪 □□進 □
秦掠人酒公秦廣輪 □□進 □
秦掠人酒公秦廣輪 □□進 □
秦掠人酒公秦廣輪 □□進 □
- 125×(25×4) 01

氏の傘下に入った土豪永田氏の居城である。木簡は、遺跡の東北部に位置する九世紀前後の遺物包含層中より出土した。他の出土遺物としては、薺串・木苔片・陶器・木盤が数点、墨書き器「鐵」・「志津」、銅製錫帶の鉢具(真金具)一箇・丸柄(表金具二箇)二箇・追方(表金具二箇)二箇、それから貨幣が一二枚出土しており、そのうち、和同開珎が三枚、万年通宝が一枚、神功開宝が八枚である。神功開宝はすべて火を受けており、一枚と五枚に着しているものが見受けられ、近くで火災があったことがうかがえる。遺構としては、木簡出土地点から西に井戸二基と柱穴跡が數箇所確認され、住居跡の可能性をのぞかせる。

8 木簡の現文・内容

- 『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』-8- (滋賀県教育委員会、近刊)
- (白井忠雄)

長野・膳棚B遺跡



(説) 木簡出土遺構の概要
6 遺跡の年代 繩文時代早期・晚期、弥生時代後期、古墳時代、平安時代、中世



(市沢英利)

- 1 所在地 長野県岡谷市今井
- 2 調査期間 一九八三年(昭58)四月~一〇月
- 3 発掘機関 長野県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 市沢英利
- 5 遺跡の種類 焦落跡
- 6 遺跡の年代 繩文時代早期・晚期、弥生時代後期、古墳時代、平安時代、中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
本遺跡は諏訪湖の北西約5km、塩竈山地山麓部の扇状地上に立地

している。標高八二六m、
周辺には先土器時代から平安時代にかけての小規模な

遺跡が点在している。中央自動車道長野線岡谷インター

チニンジ部分にあたり、
訪 約七二五〇mを調査した。

(説) その結果、調査区の大部分
は背後の山地から供給され

た砂礫層で、その中のわずかな黒色土層から縄文時代早期末・晚期の遺構・遺物が発見された。この他、弥生時代後期・古墳時代・平安時代・中世の遺物がごく少量出土している。

木簡は、本田床土下の砂礫まじりの灰褐色土層中より出土した。

付近一帯は砂礫層が分布する湧水の激しい地点で、流れ込みと考えられる弥生土器・内耳土器が少量出土したのみで、木簡に関連する遺構は検出されず、共伴遺物も明確に指摘できない。

- 8 木簡の积文・内容

(1) 「一三一」 □

(140)×31×3 0.9

両側縁は削られており、上部は切断されているが、下部は折れている。上端断面を見ると樹皮をむいたあとがそのまま残っている状態が観察できる。

9 関係文献

長野県埋蔵文化財センター「長野県埋蔵文化財センター年報」
(一九八五年)

(市沢英利)



(日) 評
り断続的に発掘調査が実施

岩手・比爪館遺跡

1 所在地 岩手県紫波郡紫波町南日詣字箱清水
2 調査期間 一九八二年(昭57)七月~九月
3 発掘機関 紫波町教育委員会

4 調査担当者 熊谷義昭・花園博文・鎌田祐二

5 遺跡の種類 集落跡及び城館跡

6 遺跡の年代 一〇世紀後半~平安時代末期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

比爪館遺跡は、東北本線日詣駅の東南約五〇〇mの町立赤石小学校付近に所在し、標高約九八mの微高地上に立地する。

比爪館は、「吾妻鏡」によると、平安時代末に存続

した奥州平泉藤原氏の分族、

比爪氏の居館である。周辺

一帯にも、平安時代末から

中世にかけての遺物が比較

的広範囲に分布している。

当遺跡は、一九七五年よ

8 木簡の模文・内容

(1) 「上□□□つよく□□」

(120) × 17 × 7 0.9

されており、比爪館以前の遺構・遺物の存在も確認されている。今までの調査の結果、堅穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡などが出土している。木簡は、一九八二年の第六次調査の時に井戸跡から一点出土した。井戸跡には、底部に方形の枠板組が残存し、木簡はその内部埋土より出土したものである。

9 関係文献

紫波町教育委員会「比爪館遺跡 第六次発掘調査報告書」
(一九八三年)

(花園博文・鎌田祐二)



『茨城県関係古代金石文資料集成』刊行さる

茨城県立歴史館が昭和五六年度から三カ年度にわたり実施してきた学術調査「茨城県関係古代金石文資料の調査集成」の成果がこのほどまとまり報告書として刊行された。茨城県内出土の土器・瓦等に施された墨書き・筆書き・刻印を可能な限り集成したもので、集成した資料の個別表と写真図版、出土遺跡の概要からなり、志田諒一氏の論稿「常陸国における古代の郡名位置比定」も収録されている。

茨城県立歴史館発行

『学術調査報告書Ⅱ』

茨城県関係古代金石文資料集成—墨書き・筆書き—

(B五版 本文九〇頁 図版九〇枚 一九八五年三月刊 非売品)

木簡研究 第六号

卷頭言——記紀批判と木簡——

直木孝次郎

一九八三年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条一坊十二坪 平
城京左京八条三坊十一坪 東大寺仏龕屋下層遺構 藤原宮跡 長
同宮・京跡 平安京右京八条二坊跡 定山遺跡 水走遺跡 津堂
遺跡 高宮遺跡 池上・曾根遺跡 町北遺跡 山垣遺跡 福成
寺遺跡 泉田宮谷遺跡 長尾沖田遺跡 小川城遺跡 道場田遺跡
宮久保遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 東光寺遺跡 北大賀遺跡
鎌脇遺跡 北福付遺跡 鶴沼東Ⅱ遺跡 下野國府跡 多賀城跡
一乗谷朝倉氏遺跡 近岡遺跡 曾根遺跡 前田遺跡 美作國府跡
草芦千軒町遺跡 尾道遺跡 芳原城跡 大宰府跡

一九七七年以前出土の木簡（六）

奈良・平城宮跡（第三三次）

平安時代の日記にみえる木簡

日本古代の人口について

叢報

『木簡研究』一～五号總目次

価値 三五〇〇円 ￥四〇〇円

山田 英雄
鎌田 元一

木簡学会会則

の他の前条の事業に参加することができる。

第一条 本会は木簡学会と称する。

第二条 本会の事務所は奈良県内に置く。

第三条 本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用に資することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、つきの事業を行う。

1 木簡に関する情報の蒐集および整理

2 研究集会の開催

3 会誌「木簡研究」その他の刊行

4 発掘調査組織、その他関連する学会・機関との連絡および協力

5 その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 木簡の調査・研究に従事し、本会の趣旨に賛同する者は会員になることができる。

二 本会に入会しようとするものは、会員二名の推薦を必要とし、委員会の承認を得なければならない。

三 会員は所定の会費を納入しなければならない。会費の額は総会において決定する。

四 会員は総会における議決権を有し、会誌の配布をうけ、そ

五 会员に本会の目的の遂行をさまたげる行為のあった場合には、委員会はこれを除名することができる。

第六条 本会は次の役員をおく。

1 会長一名

2 副会長二名

3 委員若干名

4 監事二名

第七条 委員・監事は総会において選出され、任期は二年とする。ただし、再任はさまたげない。

二 委員は委員会を組織し、会則にもとづき会務を処理する。

三 会長および副会長は、委員会の互選による。会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐する。

四 監事は会計および会務の執行を監査する。

第八条 本会は毎年一回総会を開く。

本会の会費は会費および寄付金をもっててあり、総会において会計報告を行うものとする。

第九条 この会則の変更は総会において議決するものとする。

第十一条 委員会は会務運営のため、幹事若干名を委嘱し、また細則を定めることができる。

千葉県船橋市内出土墨書き器の集成

近年、関東地方一とりわけ千葉県内で発見された集落遺跡から多量に出土する墨書き器を素材として、墨書き器論や集落論を展開した著書・論文が次々に公表されていて、墨書き器を考える上で基礎資料の整理・公刊が待たれていたが、そうした情況のなかで、このたび船橋市郷土資料館の手で船橋市内出土の墨書き器が集成されて刊行された。同館で企画された展示の際に集められた資料を基礎としてまとめられたもので、同市内の夏見大塚・本郷台・印内台の三遺跡出土のもの二〇〇点足らずが収録されている。遺跡ごとに、墨書き器の写真あるいは実測図、墨書きの拡大・実大写真あるいは実測図、及び积文、出土遺構・収蔵台帳の番号を載せてある。収録されたなかでは「福」「永」と墨書きのあるものが圧倒的に多い本郷台遺跡出土の墨書き器が特に注目を奪く。「福」「永」の文字には同筆かと思われるものが多いために筆跡鑑定が行われ、その成果の上に立った墨書き器論・集落論が展開されることを希みたい。

船橋市教育委員会発行

『船橋市郷土資料図録4 墨書き器』

(B五版 九四頁 一九八一年三月刊)

〈申込先〉 船橋市葉円台四一二五一一九 船橋郷土資料館
頒価一七〇〇円 〒二五〇〇円

彙報

第六回総会および研究集会

木簡学会第六回総会および研究集会は、一九八四年一二月一日。二日の両日、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂で開催された。両日とも約一〇〇人の出席のもと、興味深い報告と活発な質問討論が行われた。会場には、平城宮跡・平安京左京九条二坊十三町・小敷田遺跡・仙台城三ノ丸跡出土の各木簡、多賀城跡・松田橋跡出土木簡の写真、韓國新安沖底遺物の報告書、最近の中国の簡牘研究文献などが展示され、参会者の大きな関心を呼んだ。

◇第六回総会（議長　亀田隆之氏）

一二月一日（土）午後一時五分開会。まず岸俊男会長が挨拶に立ち、木簡出土の正確な記録を遗漏なく後世に伝えるという本会の原点からみて、情報の収集になお問題があること、外國の木簡に関する心を払うべきこと、会誌強化方法の問題点、奈良国立文化財研究所への謝辞などを述べられた。次に亀田隆之氏を議長に選出した。

(1)会務・編集報告（佐藤宗諭委員）

過去一年間の会活動と現状につき、以下の報告があり、了承された。(1)会員数は現在一九一名（新入会員一九名、死去一名）。(2)委員会は、一九八三年一二月四日、八四年六月九日、一〇月二十五日に開催

した。(4)新入会員の承認は、今後原則として、六月・一〇月の委員会で行いたい。(2)幹事に綾村宏・館野和己両氏に加わっていただいた。(3)八四年八月に、平城宮跡・多賀城跡・大宰府跡出土木簡の速報を会員に送付した。(4)八三年度木簡出土遺跡は三七ヵ所のうち、諸般の事情で会誌六号には、五遺跡の報告を掲載できなかつた。次号に号収載にむけて努力する。(4)韓國新安沖出土木簡の報告は、次号に掲載の予定。(5)会誌六号には一と五号の綱目次を載せた。今後も五年をめどに掲載したい。(6)木簡出土情報におお遺漏があるようである。会員の御協力をお願いしたい。(7)会誌第七号への投稿をお願いする。

(2)会計報告（岩本次郎委員）、会計監査報告（岡見監事）

一九八三年度（八三年四月一日～八四年三月三一日）の会計について、収支決算報告と説明が行われた。次に、八四年六月一四日に行われた会計監査にもとづき、会計の運営は適切であり、帳簿のあつかいも正確である旨報告された。以上の報告は、ともに承認された。

(3)役員改選（風秀三郎氏）

会則第七条にもとづき、次期（八五年四月～八七年三月）の役員改選が行われ、別掲（七頁）のことく、現役員の留任が提案され、承認された。なお次回改選期までに留任問題について検討することとなつた。

(4)その他　佐藤宗諭委員より、来年度総会および研究集会は、一九

八五年一二月七、八日に行う予定であること、第六号は額価三五〇

〇円、送料四〇〇円としたい旨の補足があり、ともに了承された。

◇研究集会

(1) 一二月一日(土)午後二時三〇分～五時三〇分(講長 青木和夫氏)

公式様文書と文書木簡

最近の中国における漢簡研究

早川報告は、主に正倉院文書中の多種多様な公式様文書の実例を

整理し、これと文書木簡とを詳細に比較検討したものである。そして、兩者に質的な差異のないことを明らかにし、口頭による行政から文書行政への展開を展望した雄大な報告であった。大庭報告は、

同「中國簡牘研究の現状」(副刊号)、永田英正「中國における雲夢

秦簡研究の現状」(第二号)、池田温「中國における簡牘研究の位相」(第三号)のあとをうけて、最近の中國における漢簡研究の現状と動向を詳細に伝え、日本本簡研究者に貴重な情報をもたらした。

研究集会後、グリル友楽にて懇親会がもたれた。

(2) 一二月二日(日)午前九時より(講長 藤野 久・田中 稔氏)

最近の各地出土の木簡

大宰府出土の木簡

寺崎保広

一九八四年出土の平城宮木簡

(コメント) 小敷田道跡出土木簡(田中正夫)、多賀城跡出土木

簡(佐藤和彦)、松田橋跡出土木簡(平川南)、韓国新安沖

出土木簡(佐藤和彦)

橋本報告は、一九八四年度出土木簡を中心に、近年の出土例の概要を示したものである。このうち平城宮出土木簡は、寺崎報告で詳しく述べられ、小敷田遺跡・多賀城跡・松田橋跡出土木簡のコメントがあった。倉住報告は、八三年出土の木簡(第六号)を詳しく検討したものである。韓国新安出土木簡のコメントは、近時出版され

た報告書を中心に行われ、海外の事例として注目をあつめた。昼食後の休憩時間に、平城宮跡第一六・次(第二次朝堂院東第一堂)調査現場を綾村宏氏の説明によつて見学した。午後の討論ののち、平野邦雄副会長の挨拶があり、三時三〇分に閉会した。

委員会報告

◇一九八四年一二月一日(土)於奈良國立文化財研究所

総会に先だって、新入会員四名の承認、役員改選、会務・編集・

会計報告、総会・研究集会の運営などについて検討した。

◇一九八五年六月二七日(木)於奈良國立文化財研究所

役員の互選により、会長に岸俊男氏、副会長に平野邦雄・大庭脩

氏を選出した。大会予定、会員の要件、会員サービス、会計中間報告

第七号の編集について検討し、新入会員四名を承認した。

◇一九八五年一〇月二九日(火)於奈良國立文化財研究所

新入会員九名を承認した。会計・編集・会誌売れゆきの報告につ

いて検討した。今年度総会・研究集会の運営について検討した。

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 7 1985

CONTENTS

Foreword—An Official with a Pen and Knife	Naoshige Tsuchida	i
Wooden Tablets Excavated in 1984	1	
Outline		
Explanatory Notes		
Nara Palace Site, Nara Prefecture; Nara Capital Site, Nara Prefecture; Remains in Nara Women's University, Nara Prefecture; Remains of Hogiji, Nara Prefecture; Fujiwara Palace Site, Nara Prefecture; Naga- oka Capital Site (1), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site (2), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site (3), Kyoto Prefecture; Remains of Dodo, Kyoto Prefecture; Remains of Imazato, Kyoto Prefecture; Re- mains of Kyoto Capital Eastern 3rd Ward on 8th Street, Kyoto Prefe- ture; Remains of Kyoto Capital Eastern 2nd Ward on 9th Street, Kyoto Prefecture; Remains of Mizuhai, Osaka Prefecture; Remains of Nishinotsuji (1), Osaka Prefecture; Remains of Nishinotsuji (2), Osaka Prefecture; Remains of Tsuboi, Osaka Prefecture; Remains in Front of Shinobugaoka Station, Osaka Prefecture; Remains of Fugenji Temple, Osaka Prefecture; Remains of Obakita, Osaka Prefecture; Remains of Karusato, Osaka Prefecture; Remains of the City of Sakai Surrounded by Moat, Osaka Prefecture; Remains of Ikedadera Temple, Osaka Prefe- ture; Remains of Dojo-Shiota, Hyogo Prefecture; Remains of Shinpo, Hyogo Prefecture; Remains of Kawagishi, Hyogo Prefecture; Remains of		

Kurami, Hyogo Prefecture; Remains of Maehigashishiro, Hyogo Prefecture; Akaborijo Castle Site, Mie Prefecture; Remains of Asahinishi, Aichi Prefecture; Remains of Kiyosujokamachi, Aichi Prefecture; Kutsukakejo Castle Site, Aichi Prefecture; Remains of San-no-maru of Yoshidajo Castle, Aichi Prefecture; Remains of Sakajiri, Shizuoka Prefecture; Remains of Akiawase, Shizuoka Prefecture; Remains of Kori, Shizuoka Prefecture; Remains of Shinmeibara-Motomiyagawa, Shizuoka Prefecture; Site of the House of Yasutoki and Tokiyori Hojo, Kanagawa Prefecture; Remains of Chibachi, Kanagawa Prefecture; Remains of Chibachi-higashi, Kanagawa Prefecture; Remains of Kurayashiki, Kanagawa Prefecture; Remains of Koshikida, Saitama Prefecture; Otsujo Castle Site, Shiga Prefecture; Remains of Kaminagahara, Shiga Prefecture; Remains of Nonomiya, Shiga Prefecture; Remains of Nose, Shiga Prefecture; Remains of Odanijojokamachi, Shiga Prefecture; Remains of Onoe, Shiga Prefecture; Remains of Kitakata-Tanaka, Shiga Prefecture; Remains of Nagata, Shiga Prefecture; Remains of Zendana B, Nagano Prefecture; Remains of Gozen-Shimizu, Fukushima Prefecture; Site of San-no-maru of Sendajo Castle, Miyagi Prefecture; Remains of Ichikawabashi, Miyagi Prefecture; Tagajo Castle Site, Miyagi Prefecture; Remains of Hizumedate, Iwate Prefecture; Remains of Oura, Yamagata Prefecture; Hotta Castle Site, Akita Prefecture; Remains of Babayashiki, Niigata Prefecture; Remains of Hyakkengawa-Taima, Okayama Prefecture; Remains of Shikata, Okayama Prefecture; Remains of Kusadosengencho, Hiroshima Prefecture; Remains of Nishinosyo II, Wakayama Prefecture; Remains of Inoue-Yakushido, Fukuoka Prefecture; Remains of Arakatame, Saga Prefecture;

Wooden Tablets Excavated before 1977 (7)..... 118

Nara Palace Site (39th Excavation)

Documents of Kushikiryo Form and Wooden Documents

.....Syohachi Hayakawa 123

Recent Studies of Han Wooden Documents in China Osamu Oba 161

The Roman Writing Tablets from Great Britain Migaku Tanaka 179

Materials for Ritual Wooden Tablets Research.....Eiichi Ishigami 187

Published by

JAPANESE SOCIETY

FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九八五年十一月二十日 印刷

一九八五年十一月二十五日 発行

〒630
奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所

編集発行
木 篤 學 会
丸 頭 清 明 氣 付

TEL (073) 三四一三九三一
振替口座 京都〇一五一三七

京都市下京区油小路弘光寺上ル
眞 陽
TEL (073) 三五一一六〇三四

印 刷

社

